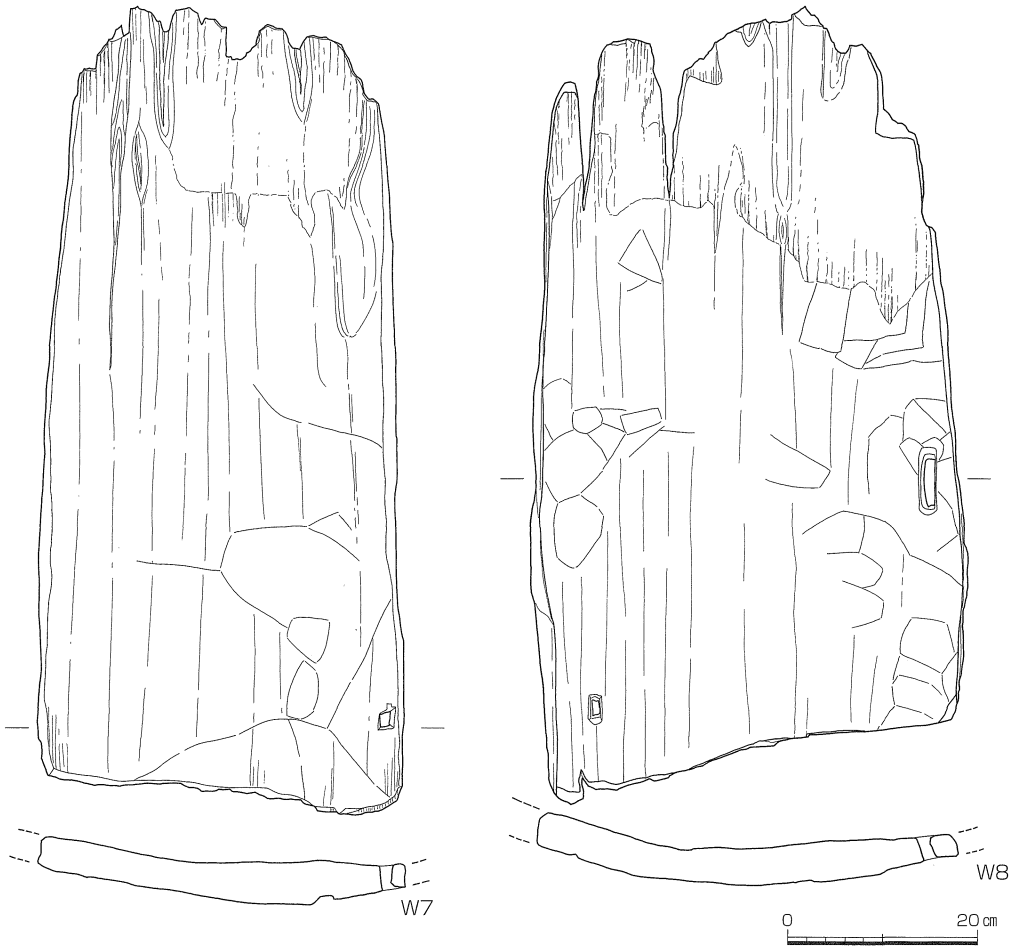


番号	器種	法量（㎝）			特徴	樹種
		長さ	幅	厚さ		
W1	盤	49.4	21.6	6.6	平面長方形の浅い盤の一部。脚は削り出しによる四脚盤と推定。	ヒノキ科
W2	井戸枠	71.0	15.1	4.5	外面の一部に加工痕あり。W3と同一個体	アカガシ亜属
W3	井戸枠	39.2	12.0	5.1	外面の一部に加工痕あり。W2と同一個体	アカガシ亜属
W4	井戸枠	53.0	16.4	3.8	図の下が井戸枠下端の可能性高い。W6と同一個体	クヌギ節
W5	井戸枠	95.0	10.4	7.5	3.0㎝角のほぞ穴あり（未貫通）。外面の一部に加工痕。	ヒノキ
W6	井戸枠	40.5	16.5	2.1	2.2㎝角のほぞ穴あり（貫通）。外面の一部に加工痕。w 4と同一個体。	クヌギ節
W7	井戸枠	86.1	38.4	4.6	下端近くに1.0×1.5㎝角のほぞ穴あり。ほぞ穴周辺と下端部に加工痕。	モミ属
W8	井戸枠	85.4	45.8	4.4	下端近くに1.0×2.0㎝角のほぞ穴、図の右側中央に1.0×5.0㎝のほぞ穴あり（いずれも貫通）。ほぞ穴周辺と下端部に加工痕。	モミ属

※樹種同定：W1は吉田生物研究所、W2～8は能城修一氏による。

図84　井戸1　出土遺物3（縮尺 1/8）

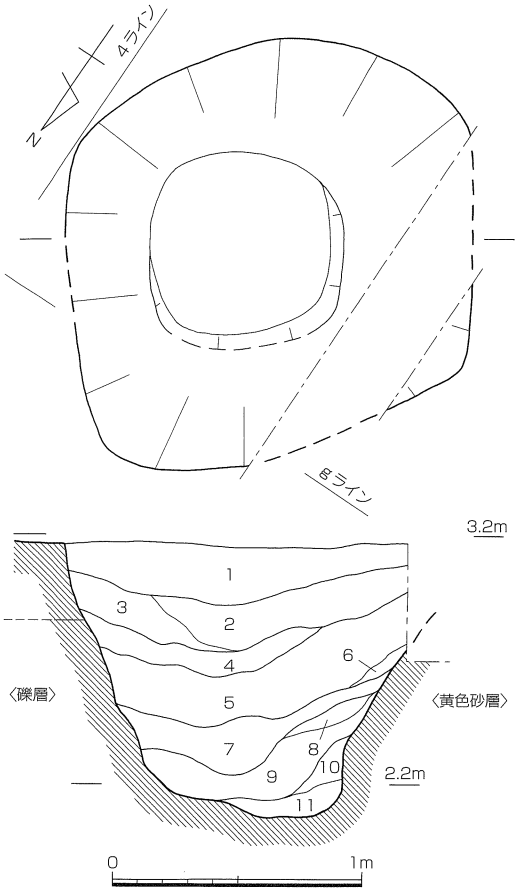
出土遺物の量はコンテナ3箱（1箱約28㌔）程度で、中小破片が大半を占める。1・3・4a・13層・16層下半からの出土量が多い。器種は甕が目立つが、完形品は確認できなかった。その他に、壺・鉢が僅かに含まれ、土錘も1点出土した。そうした中で、唯一、完形で出土し

た小形の鉢（図82－15）は単独で出土しており（写真35）、他とは異なった出土状況が注目される。また、弥生時代後期前葉の土器もかなりの量が含まれる。

４点の刳り貫き材で構成される枠材は、W7・８を除いては保存状態が悪く、取り上げ後、原形を保つことが困難であったため、一部の掲載に止めざるを得なかった。ほぞ穴を穿たれるものもあり、転用材の可能性も考えられる。また、樹種同定から、材Ｂを構成するW7・８がモミ属、材ＣをなすW2・３がアカガシ亜属、材ＤにあたるW4・５がクヌギ節、材Ａが同じくクヌギ節、杭はアカガシ亜属、材Ｂの裏側に打たれるW6がヒノキであることが判明した。このように枠材にみる樹種の違いは、それぞれの設置時期が異なる可能性を示す根拠の一つとなりそうである。その他に、木製品では、井戸枠材に混じって出土した盤の破片がある。

本井戸の時期は、古墳時代初頭と考えられる。

井戸２（図85・86、写真37）



本井戸は調査区の南西端にあたるｆ～ｇ4区に位置する。調査時の側溝によって一部が破壊される。

平面形は一辺が1.7mから1.65mを測る隅丸方形を呈する。標高2.05mに位置する底面は一部にくぼみが認められるが、概ね平坦で一辺0.8m前後の底部を形成する。掘り方の断面形は底面から斜め上方に立ち上がるやや深めの逆台形といえよう。深さは標高約3.2mの検出面から1.1m程度を測る。

前述の井戸１と比較すると、平面形や規模のほか底面レベルがかなり高い位置にある点に違いが認められるため、同一の機能を有す

1．暗茶褐色粘質土（土器，礫，Mn）
2．茶褐色土（土器，礫）
3．茶褐色土（Mn多）
4．明褐色粘質土
5．灰褐色粘土
（土器，炭，粘土粒・Mn・Fe多）
6．灰褐色土（細砂，Mn多）
7．（暗）灰褐色粘質土（粘土粒・Mn・Fe多）
8．暗灰褐色粘質土（Mn多）
9．濃灰褐色粘質土
10．青灰色細砂質土
11．青灰色細砂（Mn多）

図85　井戸２（縮尺 1/30）

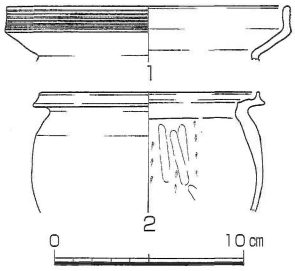


図86　井戸２　出土遺物
（縮尺 1/4）

写真37　井戸２（北西から）　a．完掘状況　b．土層断面

番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	甕	*15.0	－	－	横ナデ。櫛描沈線７条（浅）。煤。1/6残存	暗褐色	細砂多
2	鉢	*11.6	－	－	外：工具ナデ（縦方向）。内：縦削り後縦磨き（疎）。1/6残存	淡黄色～淡灰褐色	微砂。均質

る遺構ととらえることにやや躊躇する。ただ、本地点では基盤礫層が一部で標高2.85mまで上昇しており、比較的高い位置で湧水が得られる状況にあることから、底面レベルに問題はなく一応井戸と判断した。

埋土は、１～９層が粘質土、10・11層が細砂の砂質土あるいは細砂である。両者は明瞭な差を見せており、堆積条件の違いが考えられる。井戸の大半を埋める前者の土層群は、色調の差から茶褐色の１～３層と、灰褐色の５～９層に分けられるが、全体的に共通性が高く際だった差とは言い難い。

出土遺物は1.5袋（13号ポリ袋）程度で、いずれも中小破片である。弥生時代後期前葉の土

器も含まれ、その中には近接する土坑30から出土した土器と接合するものが確認された。

本井戸の時期は古墳時代初頭と考えられる。

b．土　坑

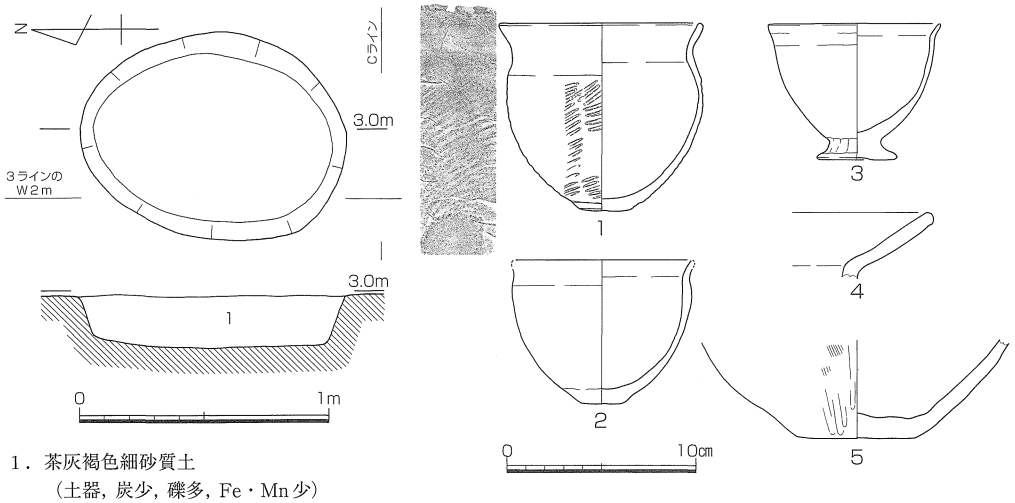
土坑32（図87、図版19）

本土坑は調査区中央北寄りにあたるb3区に位置する。

平面形は不整楕円形を呈し、長辺となる南北方向が1.1m、短辺をなす東西方向が0.85mを測る。標高2.76mに位置する底面は平坦で、検出面からの深さは0.2mである。掘り方は底面から比較的急峻に立ち上がり、箱形あるいは逆台形の断面形を示す。

埋土は単一層で細砂の砂質土である。土器も含まれるが、特に礫の包含が特徴的である。土坑内から出土した遺物の量は少なく、１袋（13号ポリ袋）程度である。壺・甕・鉢の器種が認められるが、いずれも中小破片であり、質量共に貧弱な状況を示す。ただ、遺構検出以前に、土坑の上部周辺において数点の土器を取り上げている。そうした土器と遺構内から出土した土器が接合することから、本土坑に由来する遺物として取り扱った。完形に近い小形の鉢３点（１～３）が上部から出土した土器である。

本土坑の時期は、遺物の状況から古墳時代初頭と考えられる。



１．茶灰褐色細砂質土
（土器，炭少，礫多，Fe・Mn少）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	鉢	*10.8	3.0	10.0	内：丁寧なナデ。底：ナデ。外：叩き。口縁：横ナデ。1/4～1/1残存	明橙褐色	細砂
2	鉢	*9.6	2.1	7.6	摩滅顕著。底：ナデ。黒斑。1/3～1/1残存	明橙褐色	微砂。均質
3	鉢	9.1	4.2	7.2	押圧・ナデ。摩滅。黒斑。1の胎土と共通	淡黄褐～淡黄白	細砂
4	鉢？	－	－	－	外：横ナデ。内：摩滅顕著	明橙褐色	微砂。赤色粒
5	壺？	－	6.3	－	底：5.8×6.3㎝・ナデ。外：ハケ後磨き（不明瞭）。摩滅。黒斑	淡灰色。淡橙褐色	微～細砂

図87　土坑32・出土遺物（縮尺 1/30・1/4）

土坑33（図88～90、写真38、図版18）

本土坑は調査区の中央付近にあたるｃ～ｄ2～３区に位置する。古墳時代後期の竪穴住居１によって北部分を破壊され、さらに、西端部は調査時の側溝によって失われている。また、前述した弥生時代後期の土坑10にも大きく重複している。

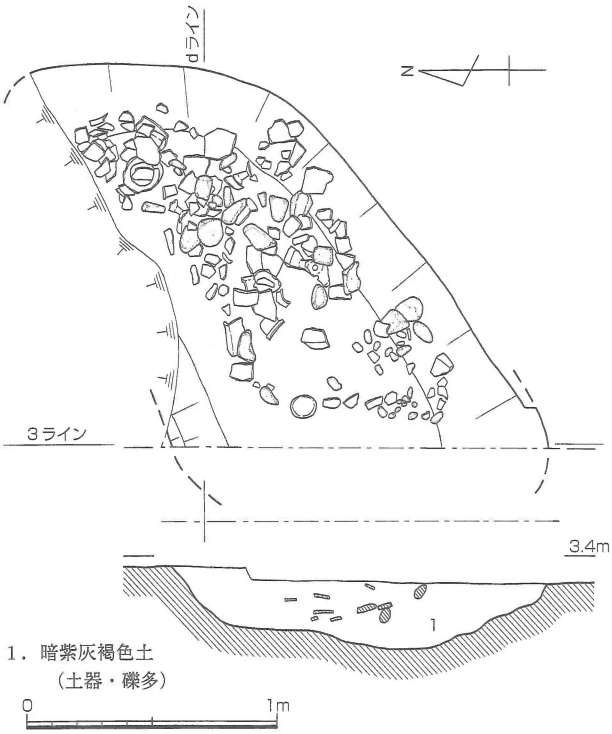
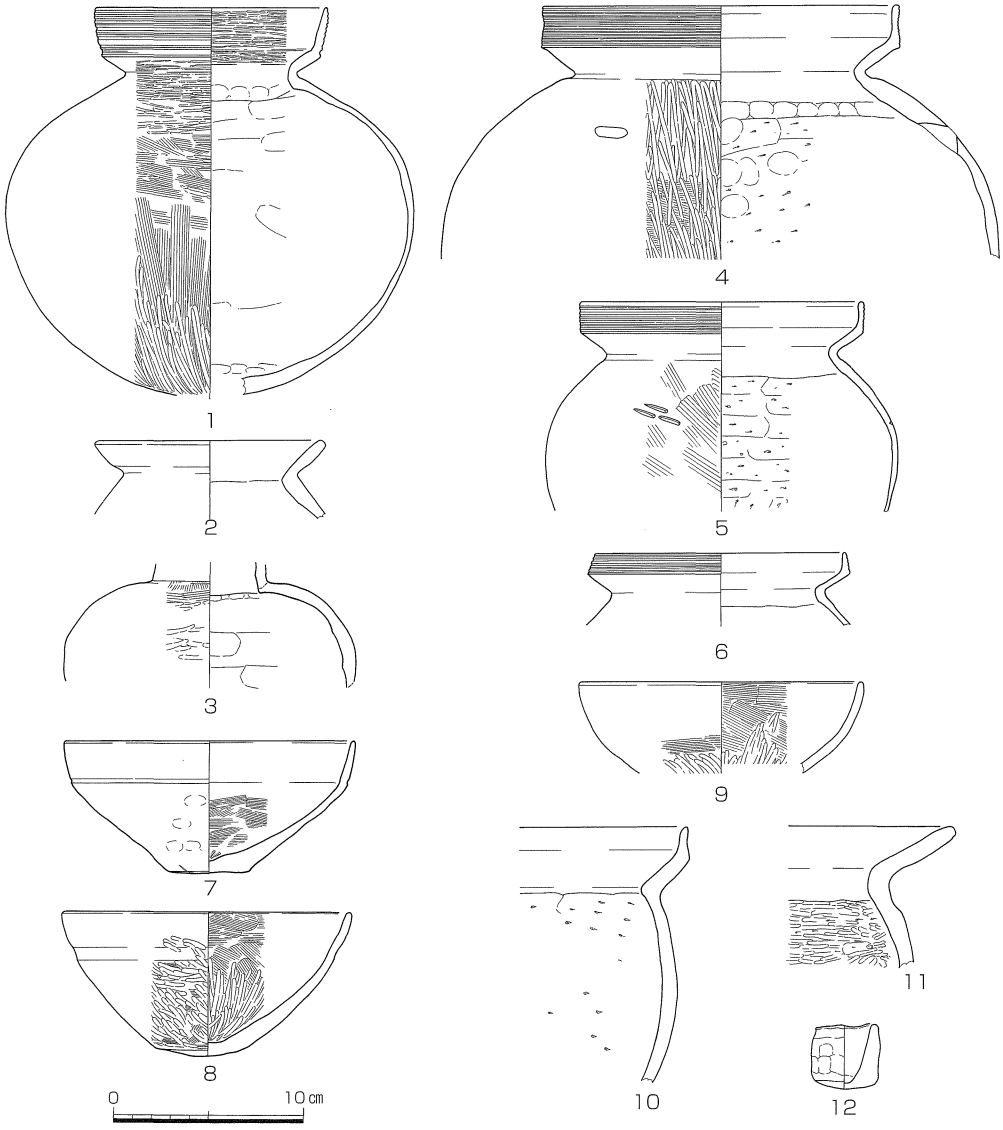


図88　土坑33（縮尺 1/30）

平面規模は、西端部の破壊のため不明確であるが、長辺では約２ｍが残存することから2.6ｍ程度が復元され、また、短辺は1.3ｍを測ることから、形態は長楕円形と考えられる。標高3.02ｍに位置する底面は平坦ではなく緩やかな凹凸が見られる。底面からの立ち上がりも緩やかにカーブしており、掘り方の断面形態は不整形な蒲鉾形としておこう。深さは、標高3.35ｍ前後の検出面から約0.3ｍを測る。

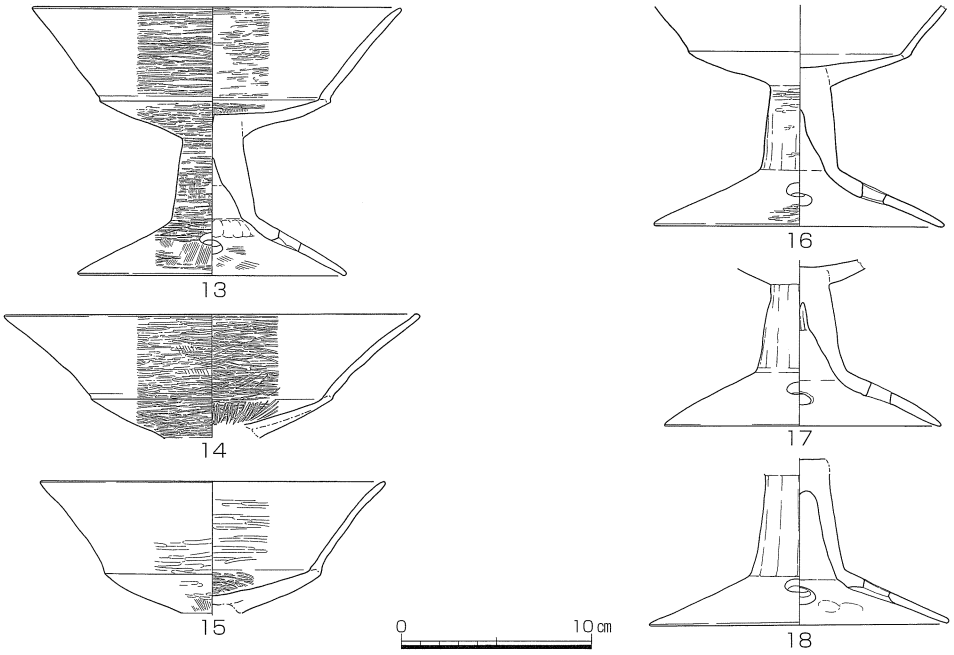
埋土は単一層で、埋土中に多くの土器と礫が混在して含まれる点が特徴である。

写真38　土坑33　遺物出土状況（南東から）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法他	色調	胎土
1	壺	12.3	−	＊20.6	丸底。内：削り後ナデ。口縁沈線9条。黒斑。体部2/5欠	淡橙色～淡黄白色	精良。水漉し粘土
2	壺	＊12.2	−	−	横ナデ。1/5残存	淡灰黄色	微砂
3	壺	−	−	−	摩滅顕著。内：削り？。外：磨き？。1/2残存。	淡橙色	微砂少。精良
4	甕	＊19.0	−	−	櫛描沈線12条。外：ハケ後磨き・凹凸。穿孔1ヵ所。1/3残。	黄灰褐～暗淡褐	細砂。角閃石　均質
5	甕	＊15.0	−	−	櫛描沈線7条。外：ハケ・煤・列点文3個1ヵ所。1/8残。　胎土均質	淡灰褐色	微砂多。角閃石
6	甕	＊13.3	−	−	摩滅。櫛描沈線5条。　赤色粒・胎土均質	灰褐色。淡灰黄色	微砂多。角閃石
7	鉢	＊15.4	4.2	7.0	外：底に葉脈痕・押圧・ナデ。内：ハケ。1/4残存	茶黒色～暗灰褐色	精良。水漉し粘土
8	鉢	＊15.4	4.3	7.6	底：突出気味・ナデ。1/2～3/4残存	暗灰褐色	微砂。角閃石
9	鉢	＊15.0	−	−	外：口縁横ナデ・摩滅。1/5残存	灰褐色。灰黒色	微砂
10	鉢	−	−	−	大形鉢。摩滅。口縁横ナデ。内面削り。内外被熱痕。　赤色粒多	明橙褐。淡橙褐	微砂～細礫多
11	鉢	−	−	−	大形鉢。口縁～頸部：横ナデ。胴外：ハケ後ナデ。内：削り後磨き	淡黄白色～淡灰色	粗砂～細礫
12	鉢	3.4	3.2	3.4	手づくね土器。押圧・ナデ。内：横ナデ。黒斑	淡橙褐～淡黄灰白	精良。水漉し粘土

図89　土坑33　出土遺物1（縮尺 1/4）



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法他	色調	胎土
13	高杯	19.5	14.2	14.2	受け部内：縦ハケ後磨き(不鮮明)。円孔4ヵ所。3/4残存	黄褐色。明橙褐	微砂少。精良
14	高杯	*21.9	−	−	磨き(細)。内：一部煤。2/5残存	明橙色〜淡褐色	微砂少。精良
15	高杯	*18.2	−	−	摩滅。受け部：ハケ後磨き。黒斑。1/6〜2/3残	淡黄褐色	微砂少。精良
16	高杯	−	*15.4	−	摩滅顕著。円孔4ヵ所(3ヵ所確認)。1/4残。 赤色粒	淡橙褐。暗黄褐	微砂。角閃石多
17	高杯	−	*14.6	−	摩滅顕著。円孔4ヵ所推定(2ヵ所確認)。1/3残。 赤色粒	淡黄褐〜淡橙褐	微砂少。精良
18	高杯	−	15.8	−	摩滅顕著。円孔4ヵ所	明黄橙。明赤橙	精良。水漉し粘土

図90　土坑33　出土遺物2（縮尺 1/4）

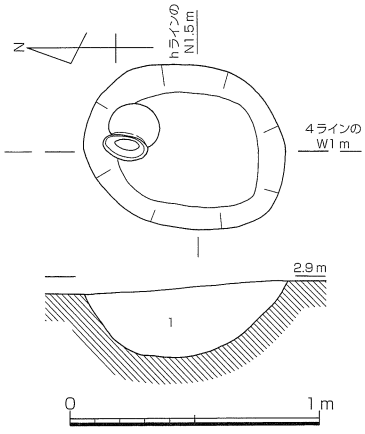
遺物はコンテナ3.5箱（1箱28㍑）の量が出土した。その多くは中形〜大形の破片である。器種は壺・甕・高杯・鉢が含まれるが、高杯が多く含まれる傾向が認められた。

本土坑の時期は古墳時代初頭と考えられる。

土坑34（図91・92、写真39、図版19）

本土坑は調査区の南端にあたるg4区に位置し、前述した井戸2の南辺に隣接する。

平面規模は長辺が0.8m、短辺が0.65mを測る。やや南北に長辺を有する楕円形を呈する。標高2.8〜2.9mの検出面から掘り込まれ、標高2.6mに位置する底面に至る。底面は平坦ではなく丸みをもっており、掘り方断面形はボール状を呈する。深さは0.3mを測る。



1．灰黄色砂質土
（土器，灰色砂ブロック・Mn・Fe多）

図91　土坑34　（縮尺 1/30）

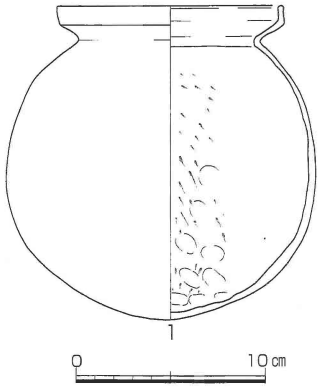


写真39　土坑34　出土遺物状況（南西から）

番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	甕	12.0	−	16.6	丸底。口縁横ナデ。外：丁寧なナデ・黒斑・被熱痕。　赤色粒	灰褐色〜黒色	細砂。角閃石

図92　土坑34　出土遺物（縮尺 1/4）

埋土は単一の土層で、灰黄色の砂質土で埋められる。土層中には灰色の砂がブロック状に含まれ、鉄分の沈着が顕著で黄色の色調を強めている。基盤層に近い土層である。

遺物は完形の甕が１点出土した以外は、小〜細片が数点あるのみである。甕は底面上において出土したが、平面的には土坑内で北よりの位置に立った状態であった。甕は完全な丸底を呈し、胴部は下ぶくれのプロポーションを示す。

本土坑の時期は、甕の特徴から、古墳時代前期が想定される。

c．落　　ち

落ち（図93〜95、写真40）

調査区南端において東西方向に検出された。ｇライン付近にあたる。

検出面は標高3.4m前後である。上面から約20〜30度程度の緩い角度で南に向けて傾斜し、標高2.9mに位置する底面に達する。底面は平坦で、上面からの深さは約50cmを測る。

埋土は４層に分層したが、2a層と2b層は非常に類似した土層であり、３層にまとめられる。１層は粘性が強くて比較的細かな砂粒で構成されるベースに、一定量の細砂あるいは粗砂といった目の粗い砂粒を含む土層である。それに対して、２層は黄色の色調が強い砂質土であり、明らかに異なった土質を見せる。３層は色調面では２層と共通するが粘性を強めている。下層にあたる２・３層には鉄分の沈着が目立つ。いずれも水平堆積を見せており、人為的に一気に埋め戻されたような状況は考えにくい。

出土遺物の量は、コンテナ1.5箱（1箱約28㍑）程度である。壺・甕が中心であるが、器種に関して偏りは認められない。また、いずれも中小形の破片である。

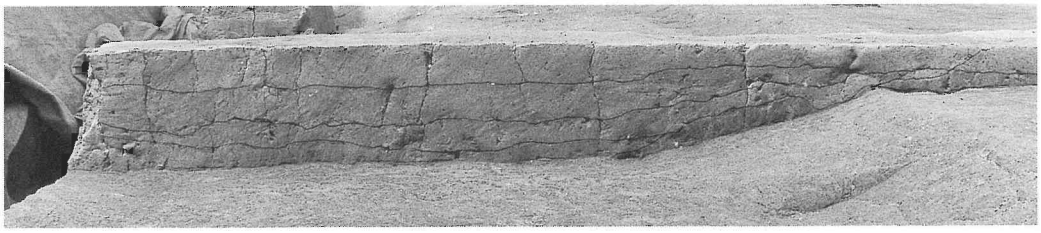
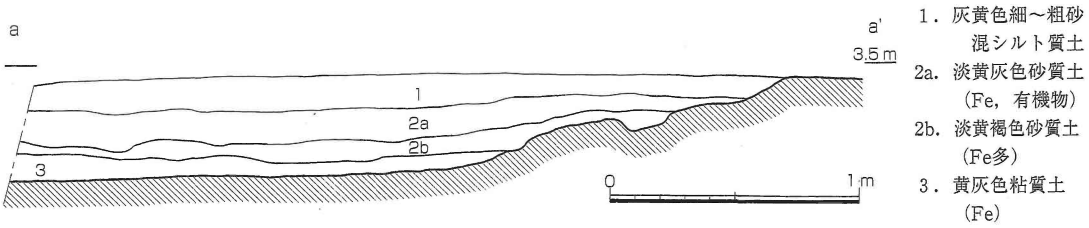
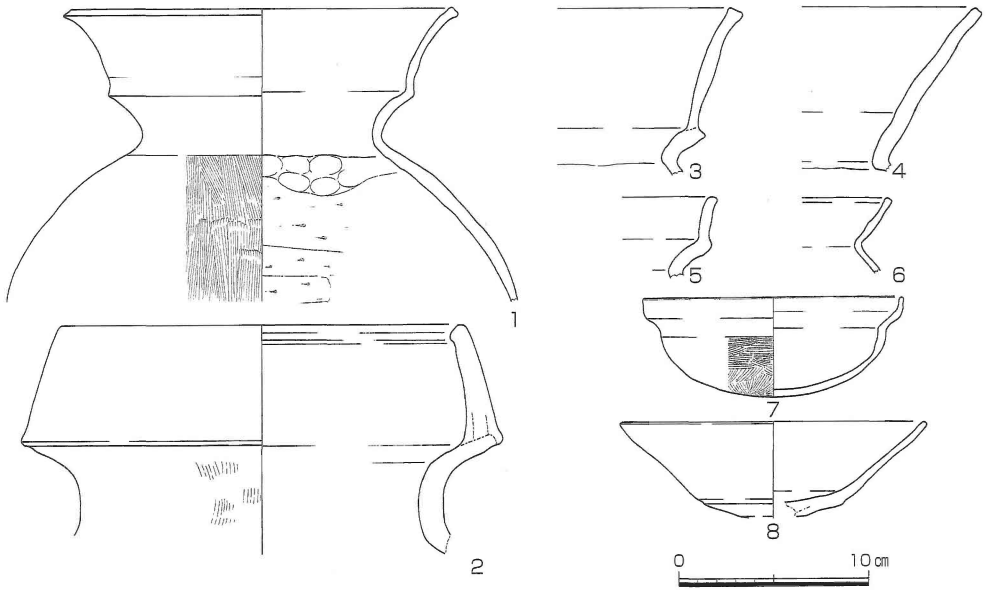


写真40　「落ち」土層断面（東から）

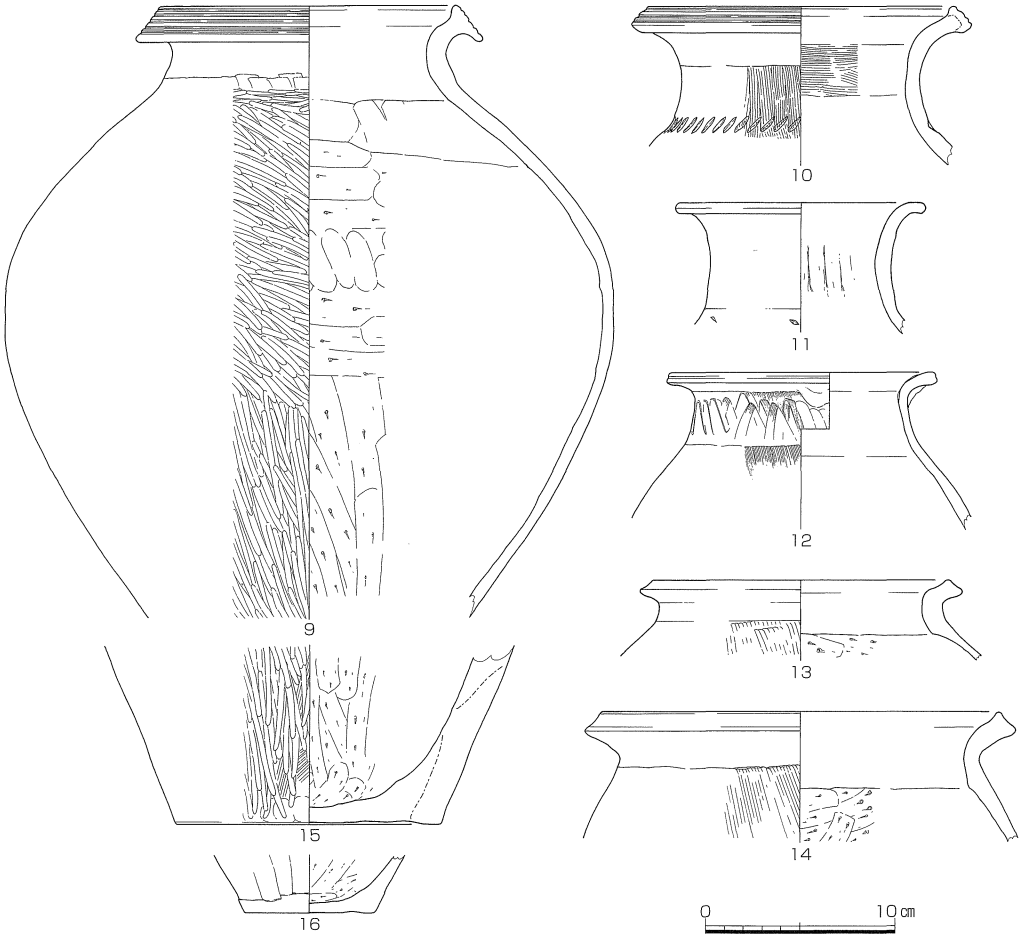




番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺	*20.1	－	－	内：篦磨き（右へ）。口縁横ナデ。1/3残。　角閃石少・胎土均質	淡灰褐色	細砂。赤色粒
2	壺	－	－	－	頸部外面ハケ後横ナデ。他は横ナデ。1/3残。　胎土均質	淡黄灰白色	細砂。角閃石
3	壺	－	－	－	頸部内面篦削り。他は横ナデ	淡橙褐色	細～粗砂
4	壺	－	－	－	口縁横ナデ。胴部内面篦削り	淡黄白色	細砂
5	壺	－	－	－	横ナデ	淡灰白色	細砂。角閃石多
6	甕	－	－	－	摩滅顕著	黄白色	細砂。均質
7	鉢	*13.7	－	5.3	丸底。内：丁寧なナデ。体部外面ハケ。1/3残存	淡黄白～淡灰白	微砂。胎土均質
8	高杯	*16.2	－	－	受け部外面削り後磨き。他は磨き。1/4残存	赤褐色	微砂。精良

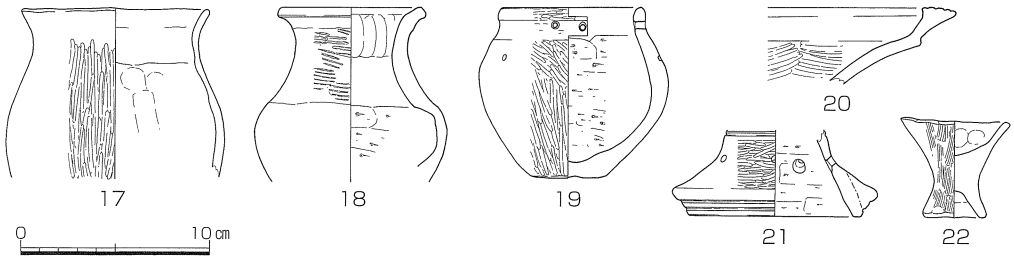
図93　「落ち」土層断面・出土遺物1（縮尺 1/30・1/4）

遺物の出土位置は、その出土レベルによって、上層と下層に分けられる。上層出土の遺物（図93）は、検出面において点在した状態で出土したものを中心とする。これらの遺物は、落ちを埋める土層中に含まれないものも多いが、出土地点が落ちの肩部ラインに沿っていることや接合関係などから、本来は本遺構に伴うと判断した。時期は大半が古墳時代初頭に属するが、一部に弥生時代後期初頭の土器を含む。ただし、上面出土のものは古墳時代に限られる。下層出土の遺物（図94・95）は、上層出土の遺物よりも出土量が多い。遺物の出土状況から、上下



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法他	色調	胎土
9	壺	15.7	−	−	外：ハケはナデ状。肩部内面削り後ナデ。口縁5条沈線。4/5残存	淡橙灰褐。淡橙褐	粗砂〜細礫
10	壺	＊16.4	−	−	内：体部ナデ。外：頸部ハケの下端が列点文に。1/3残存	灰褐色。黄橙褐色	細砂。角閃石
11	壺	＊13.2	−	−	外〜口：横ナデ。内：表面剝落。列点文2ヵ所確認。1/3残存	淡橙褐色	微砂少。角閃石
12	壺	＊14.0	−	−	口：補修痕。胴部内：押圧？。外：工具ナデ・頸部は文様状。1/4残	淡黄褐色	細砂。角閃石
13	甕	＊15.8	−	−	外：ハケ(浅)・媒。内：削り(右へ)。1/5残	(暗)茶褐色	細砂〜粗砂
14	甕	＊21.2	−	−	口縁横ナデ後胴部外ハケ(浅)。内：削り(右へ)。1/5残存	明橙褐色	粗砂。赤色粒
15	壺	−	＊14.1	−	底外：押圧・ナデ。外：黒斑。1/3残存	黄褐色	粗砂
16	甕	−	6.8	−	径6.8×7.2cm。底外：ナデ。外：工具ナデ・黒斑。3/4残存	黒色。灰褐色	微砂。均質

図94　「落ち」　出土遺物2（縮尺 1/4）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
17	鉢	*10.0	－	－	口縁横ナデ後体部外面磨き。内：摩滅・ナデか削り？。1/3残	淡橙灰白色	細砂。赤色粒
18	壺	7.4	－	－	外：頸部叩き・胴部ナデ。内：頸部下半ナデ	橙褐色～暗灰褐色	細～粗砂。角閃石
19	鉢	*7.5	4.0	9.0	底外：ナデ。円孔２個１対１ヵ所確認。円形刺突１ヵ所。1/4～3/4残	暗橙褐色	細～粗砂。角閃石
20	高杯	－	－	－	口縁：横ナデ・沈線４条。受け部外：削り後横磨き。受け部内：横磨き	赤～明褐色	細砂
21	高杯	－	*9.2	－	円孔２ヵ所確認。残存	黒灰褐色	細砂。角閃石多
22	鉢	5.8	3.3	5.1	器高５～5.2㎝。ミニチュア。口縁打ち欠きか。内：ナデ。1/4欠	黄～橙褐色	細砂～粗砂

図95　「落ち」　出土遺物３（縮尺 1/4）

層を明瞭に分離することは困難であるが、堆積土層の１層と２層の違いが、上下層遺物の出土レベルの違いにほぼ対応する可能性が高い。

この傾斜面が、人為的なものであるのか、あるいは自然地形を示すものかについては、その評価に苦慮するが、傾斜面と底面が比較的整えられた状況であることなどから、一応、人為的加工が施された遺構として積極的にとらえた。下層に弥生時代後期の土器が多いこと、そして上層には古墳時代の土器に混ざって弥生時代後期の土器が認められ、下層出土の土器と接合することなどから、機能した時期としては、弥生時代後期前葉段階に形成されたものが、古墳時代前期においても再度使われ廃棄されたと判断される。

（２）後　　期

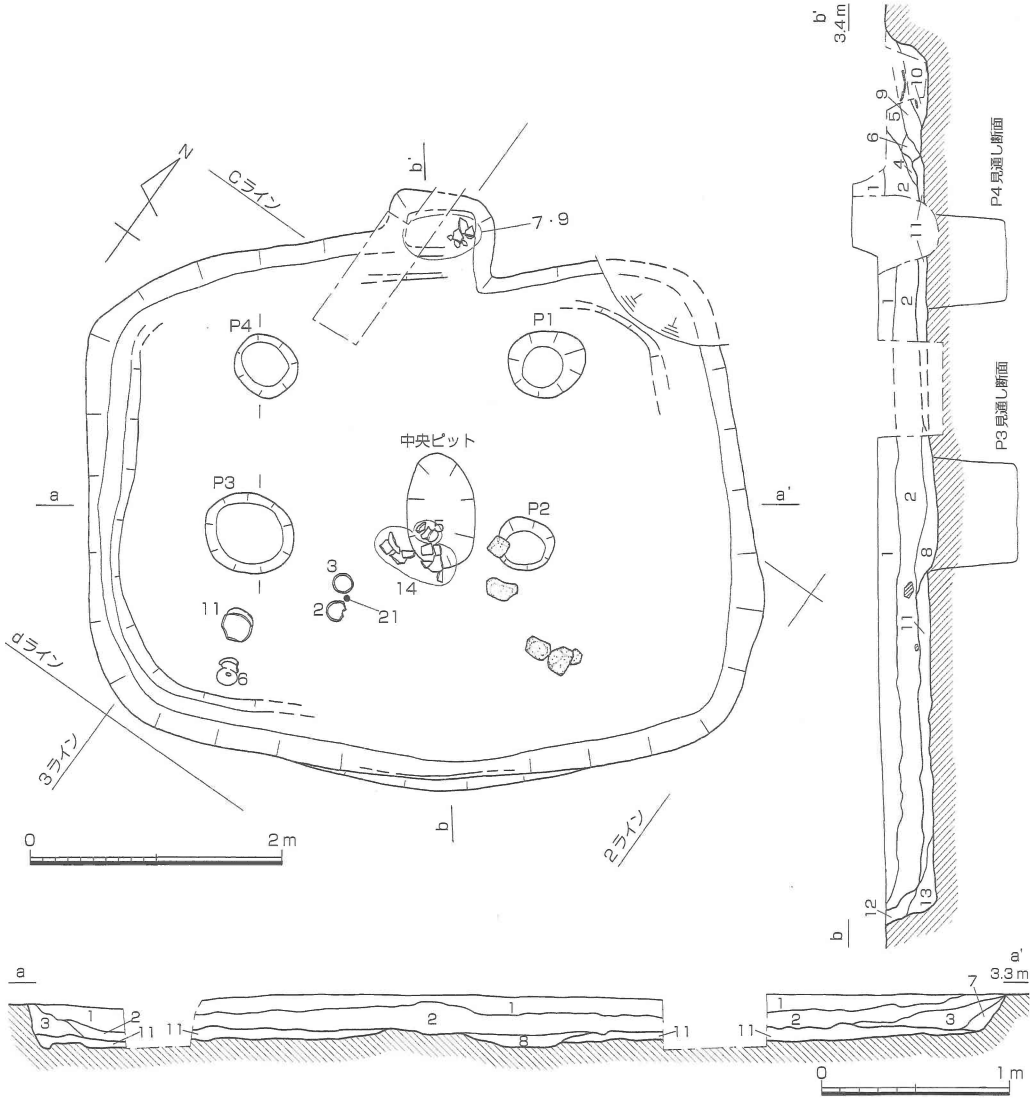
ａ．竪穴住居

竪穴住居１（図96～99、写真41～43、図版19・20）

本遺構は調査区の北東部にあたるｂ～ｃ２～３区に位置する。

４本柱で竈付きの隅丸方形住居と考えられる。平面規模は、北東－南西方向に軸をもつ長辺が5.25m、北西－南東方向に軸をもつ短辺が4.25mを測る。住居の北西面にあたる長辺中央部には0.9m×0.5m程度の長方形の張り出しが認められ、竈の残骸が確認された。検出面は標高3.2m前後、そして、掘り方の最下面は標高３m付近に位置しており、深さ約0.25mが残存していた。こうした状況から、本来の掘削面はより上位に求められ、上面の削平がかなりの規模で及んでいることが予想される。

本住居に伴うピットは、11層上面において５基が確認された。１基は中央ピットに当たる。径１m×0.5m前後の楕円形を呈し、深さは約５㎝の浅い皿状の形態を呈する。埋土（８層）



1．灰褐色砂質土
（黄灰色土ブロック）
2．褐色砂質土
（黄灰色土・
灰白色細砂ブロック）
3．濃褐色砂質土
4．暗褐色砂質土
5．淡褐灰色砂質土
6．褐灰色砂質土
7．灰黄褐色砂質土
8．暗褐色粘質土
9．淡灰褐色砂質土（土器，甕）
10．灰褐色砂質土（炭，焼土）
11．暗褐色砂質土
（黄灰色土・
灰白色細砂ブロック少，Mn）
12．灰黄褐色砂質土（ベース混）
13．褐灰色砂質土
P－1：淡灰褐色細砂質土
P－2：暗灰褐色細砂質土
P－3：灰褐色細砂質土
P－4：淡黄灰褐色細砂質土

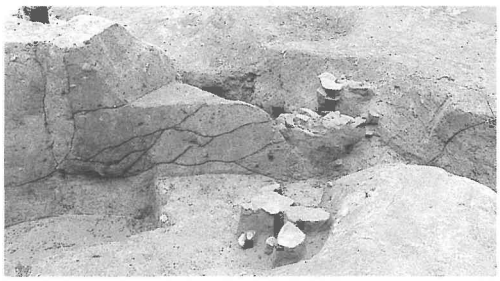


写真41　竈部分（北東から）

図96　竪穴住居1（縮尺　平面図 1/60　断面図 1/40）

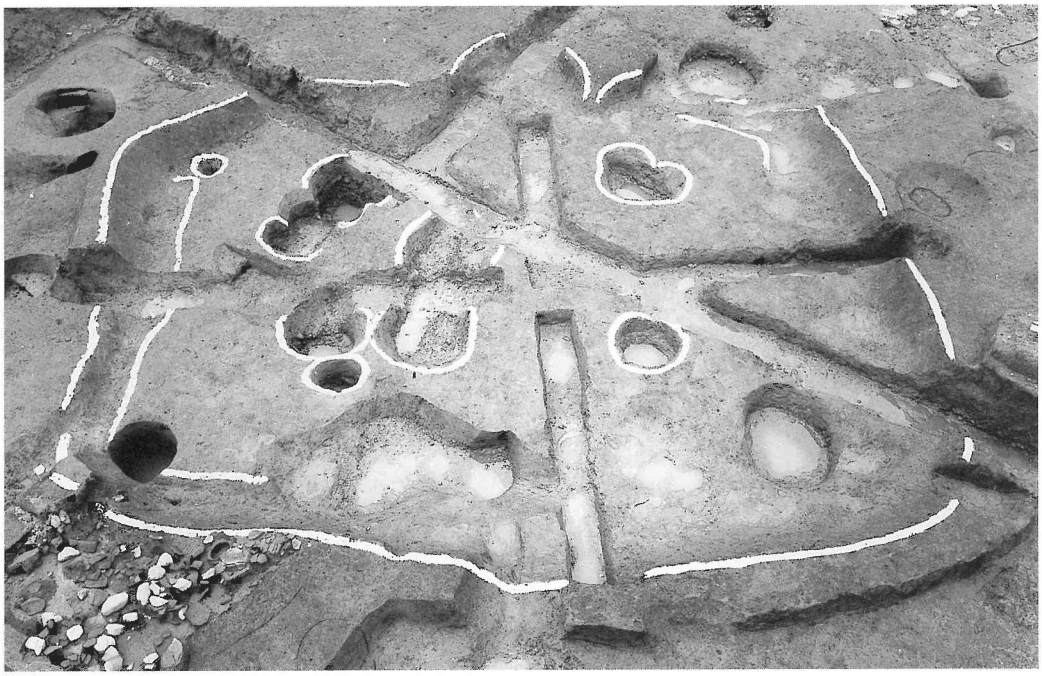
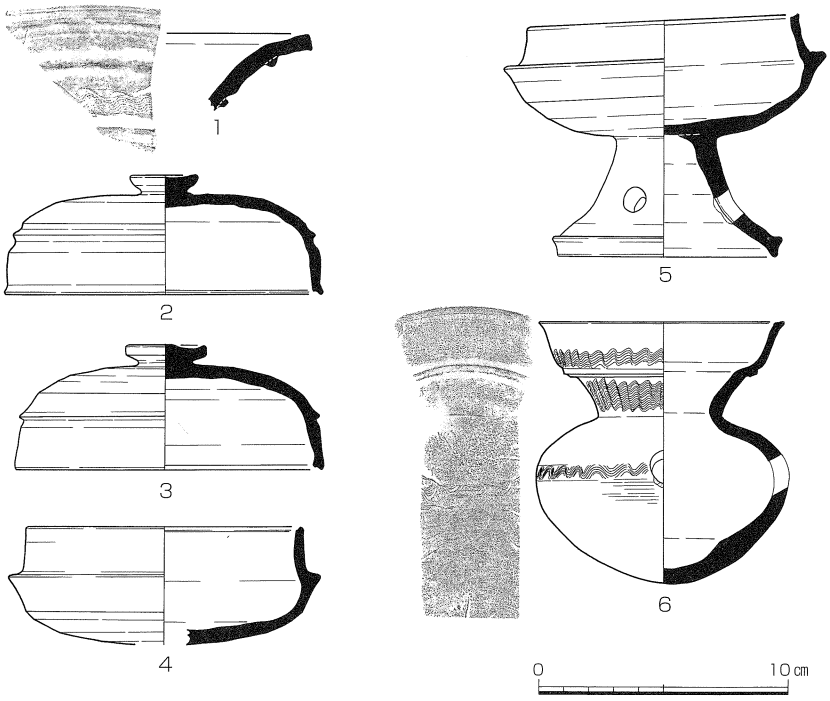


写真42　竪穴住居１　完掘状況（南東から）

は粘質が強い特徴を示し、他の土層とは明瞭に異なる。残る４基（Ｐ１～４）は、その位置関係から本住居の柱穴をなすと判断される。規模は、直径が0.45～0.7m、深さは0.4～0.5m（一部0.35m）を測る。やや大きすぎる感もあるが、掘り方を示すと考えている。埋土はいずれも灰褐色系の色調を示す細砂の砂質土である点で共通する。

写真43　遺物出土状況（南から）

柱穴が検出された11層上面、あるいは同面から数cmの厚みをもつ範囲の中で、主要な遺物が点在して出土した。例えば、完形に近いものでは須恵器杯蓋（図97－２・３）・同瑳（同－６）・土師器高杯（図98－11）が住居内の南西域に、そして、中央ピット付近に須恵器高杯（図97－５・写真43）とやや小形の破片であるが土師器甑（図98－14）が集中している。さらに、同層上面には焼土の分布も認められることから、同面が最終床面として利用されていた可能性が高いと考えられる。ただし、11層が床面をなしたことは確かであるが、土質としては、他の土層と際だった差を示さない点や一部に基盤礫層の露出も見られることから、貼り床として形成されたのかどうかは不明確である。11層上面の高さは標高３～3.05m、掘り方底面は同2.95～３mで基盤の砂層あ



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法他	色調	胎土
1	壺	−	−	−	回転ナデ。櫛描波状文。シャープな仕上がり	暗灰色	精良
2	杯蓋	12.8	−	4.8	つまみ径2.8㎝。轆轤回転：右。削り範囲広い。シャープな仕上がり	淡青灰色。淡灰色	精良
3	杯蓋	12.5	−	5.0	つまみ径3.3㎝。轆轤回転：右。削り範囲広い。シャープな仕上がり	淡青灰色	精良
4	杯身	*11.2	−	4.7	轆轤回転：右。削り範囲広い。1/3残存	暗灰色	粗砂少
5	高杯	10.9	8.8	9.4	器高9.2～9.7㎝。円孔3ヵ所	灰色	精良
6	甕	9.9	−	10.6	底外：回転篦削り後ナデ。シャープな仕上がり。一部赤銅色を帯びる。	暗灰色	精良

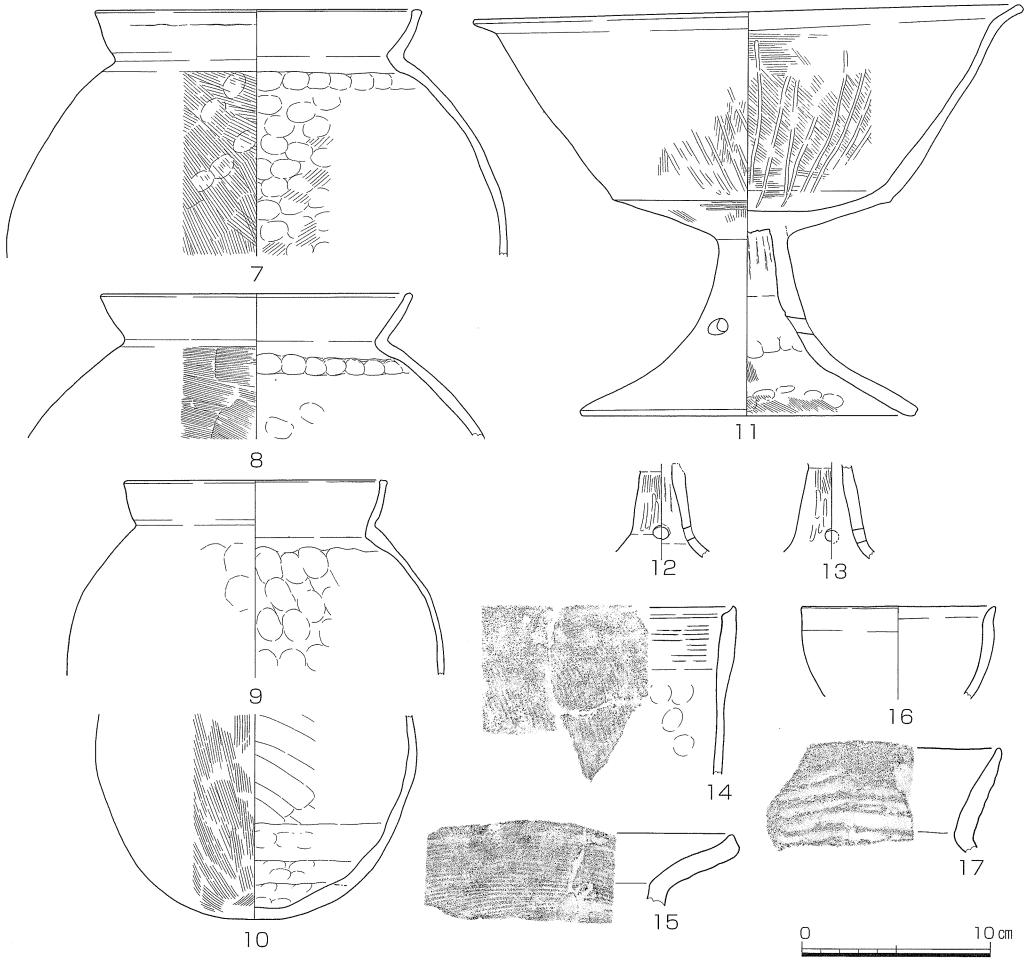
図97　竪穴住居1　出土遺物1（縮尺 1/3）

るいは礫層面に達している。また、最下面では一部において壁帯溝に似た溝状のくぼみが認められたが、非常に不明瞭なものであった。

北西部の張り出し部に形成される竈部分には炭化物や焼土を包含する10層が堆積し、その上面には土師器甕（図98－７・９）の破片が張り付くように出土した（写真41）。同層が竈の使用に伴う堆積土であると考えられる。

こうした土層上部を覆う１～７層は住居廃棄後の埋土である。土層中には、弥生時代後期あるいは古墳時代前期の遺物が比較的多く含まれる。本調査地点には、同時期の遺構が集中的に分布することを考慮すると、本住居が埋め戻されるかあるいは自然埋没する際に、周辺の土壌に混入して入り込んだことが予想される。

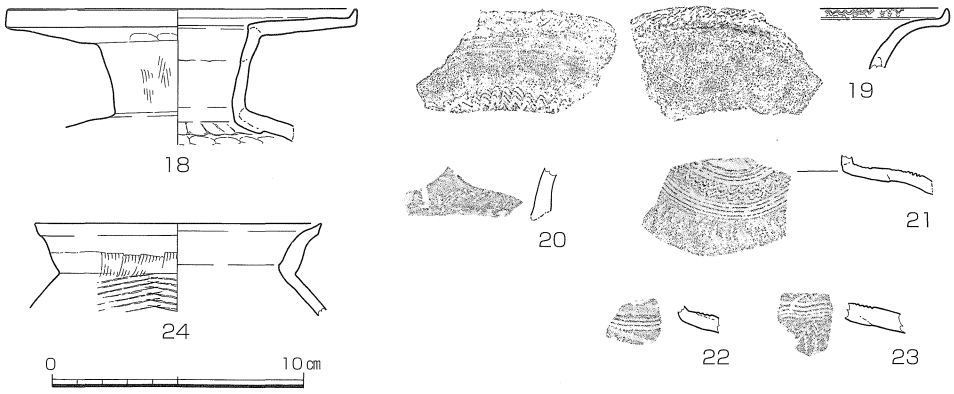
遺物はコンテナ4.5箱（１箱約28㍑）程度が出土した。その中には、本遺構を竪穴住居として検出して確定した面よりも上層において、まとまりを認めつつ取り上げた遺物が約0.5箱が



番号	器種	法量（㎝）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
7	甕	17.3	−	−	口縁横ナデ。内面：押圧後一部ハケ。黒斑	淡黄灰褐(白)色	微砂。赤色粒多
8	甕	＊16.5	−	−	摩滅。口縁横ナデ。外面：ハケ(細)・黒斑。1/4残存	淡黄灰白色	微砂多
9	甕	13.8	−	−	胴部外：叩き(面残存) 後ナデ。胴部2/3欠 赤色粒多	赤橙色～灰褐色	微砂多。角閃石多
10	甕	−	−	−	ほとんど丸底。内：ナデあげ・押圧。外：ハケ・煤。1/3残存	暗橙褐色	微砂多
11	高杯	29.1	17.6	21.5	器高21～21.9㎝。脚外：ナデ。円孔3ヵ所。受け部：摩滅。2/3～1/2残	明橙褐色	精良
12	高杯	−	−	−	外：ハケ後磨き。円孔2ヵ所確認。1/2残存	明橙色。明黄白色	精良
13	高杯	−	−	−	外：ハケ後磨き。円孔2ヵ所確認。1/2残存	淡灰黄色	精良
14	甑	−	−	−	内：上半工具ナデ・下半ナデ。外：縦ハケ後押圧。口縁横ナデ	茶褐色	微砂多。角閃石多
15	甕	−	−	−	長胴甕？。外：口縁横ナデ後縦ハケ。胴部内：ナデ？	暗橙褐色	微砂
16	鉢	＊10.3	−	−	横ナデ・ナデ。1/2残存	橙褐色	微砂
17	製塩土器	−	−	−	外：叩き・被熱痕。内：押圧・ナデ。	淡橙灰色	細砂多。粗雑

図98　竪穴住居1　出土遺物2（縮尺 1/4）

含まれる。本来、この遺物群は住居の上層出土として扱われるものであろう。こうした遺物には、古墳時代後期以外に、古墳時代前期あるいは弥生時代後期前葉の土器が比較的多く含まれる。ただし、いずれも小破片であり、古墳時代後期の遺物に完形品や大形破片のものが多い状況とは明らかに異なる。周辺に展開する同時期の遺構群からの混入と捉えられる。



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法他	色調	胎土
18	壺	*13.9	−	−	押圧・ナデ。表面凹凸あり。頸部外：ハケ痕残存。1/4残存	灰褐色。(断)黒色	細砂。角閃石多
19	壺	−	−	−	横ナデ。口縁内外面：櫛描波状文。頸部外面下半：櫛描波状文。1/5残	暗灰褐色	微砂。角閃石多
20	壺	−	−	−	ナデ。櫛描波状文。頸部をなす。	橙色	微砂。水漉し粘土
21	壺	−	−	−	沈線文・波状文・列点文は同一工具(幅5㎜・4本の櫛描き)	暗灰褐色	微砂。角閃石
22	壺	−	−	−	ナデ。櫛描沈線(3条)の下に櫛描波状文確認。	灰褐色。明橙色	微砂。角閃石
23	壺	−	−	−	ナデ。櫛描沈線(5条)の上下に櫛描波状文確認。	灰褐色。明橙色	微砂。水漉し粘土
24	甕	*11.4	−	−	外：縦ハケ後叩き。内：ナデ。口縁：横ナデ。1/4残存	暗灰褐色。(断)黒	微砂。角閃石多

図99　竪穴住居1　出土遺物3（縮尺 1/3）

本住居に伴う遺物は、出土量では、土師器と須恵器の比率は3～4：1の割合で前者が多い傾向を示す。個々の遺物の残存率では、須恵器は完形品あるいは大形破片が多いのに対して土師器は中形～小形の破片の占める割合が高い。須恵器に関して、その時期を検討すると、大半のものは諸特徴から陶邑編年のTK23～47段階が想定され、住居側縁の中央部に作りつけ竈が普及する時期としても矛盾がない。ただ、壺（1）については、やや古い時期の特徴を示しており、前段階（TK208）まで遡る可能性が高い。土師器では、竈内や床面から出土した甕（7～9）と高杯（11）が残存率の高い遺物である。甕の口縁形態には、斜め上方に立ち上がりやや内湾気味にナデ仕上げがなされ、端部には面が残るもの（9）と残らないもの（7・8）が認められる。内面の削りは施されない。同時期にあたる高塚遺跡[1]などの資料からは初期須恵器に伴う土師器の特徴に近く、須恵器壺（1）に近い時期が考えられる。高杯に関しても同様である。また、製塩土器（24）が含まれるが、厚手の器壁で大振りのタイプであることから、時期的にはTK23～47段階と大きく食い違うことはないであろう。

以上の状況をまとめると、古い特徴をもつ遺物は土師器の甕・高杯と須恵器の壺であり、新しいものでは完形に近い大半の須恵器と一部の土師器片となる。住居の使用時期を考える上で、わずかな小片のみの古段階の須恵器を積極的に参考として良いものか苦慮する。しかし、同時期の遺構が他に無く、同時期の可能性を示す土師器が存在する点から、土師器編年に問題が無いとすると、本遺構の時期は、5世紀末～6世紀初頭の段階に廃絶されてはいるが、構築時期に関してはもう一段階遡る可能性も考える必要があるかもしれない。

その他に、時期が古い遺物であるが、注目される土器（図99）を報告しよう。器種は壺と甕が認められ、灰色と橙色の色調を呈する２タイプの胎土や、櫛描き文による波状文・刺突文などが壺の口縁部や頸部あるいは肩部に施文される文様にも際だった特徴を見せる。少なくとも、山陽地域では見ることのない土器であり、近江あるいは東海地域からの搬入品の可能性も考えられるが、近江でも一般的ではなく、現段階では確定できていない(2)。

註１　柴田英樹2000「古墳時代中期の土器」『高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告150　岡山県教育委員会
註２　亀田修一氏・正岡睦夫氏・植田文雄氏の教示による。

竪穴住居２（図100～102、写真44・45、図版23）

本遺構は、調査区の北東端部にあたるａ～ｂ2～３区に位置する。前述した竪穴住居１の北東コーナー上を僅かにかすめるような重複関係をもつ。

平面形態は隅丸長方形で、北西－南東方向を示す長辺の長さが5.95m、北東－南西方向に軸を有する短辺の長さは4.7mを測る。竪穴住居１とほぼ同規模の形状であるが、その軸方向は約90度振った状態を示す。床面は標高３～3.1mに位置し、一部で基盤砂層が露出した状態を呈するため、非常に荒れた状態を見せる。そうした土質の影響もあって、柱穴は極めて不明瞭であった。かろうじて検出した３基の確実性はやや低いといえる。規模は直径0.4～0.6m、深さは0.15～0.2mである。また、床面上（標高3.05m）には住居のほぼ中央部に焼土面が形成されている。その範囲は、調査時の側溝による破壊で多くを失っているため正確な形状は不明であるが、推定すると0.6×0.7m程度の楕円形に広がりをみせ、厚さは１㎝程度が確認される。その他に、後述する竈の焚き口周辺の床面にも広い範囲で焼土の分布が認められた（図100－トーン域）。埋土（ａ・ｂ断面）は、床面直上に堆積する５～17層と、その上層を埋める１～４層に大別されるが、全体的に砂質の強い土層として大きな差は示さない。

住居の北東側の長辺中央部に、外側方向に向かって溝状に伸びる竈部分がとりく。竈を形成する幅0.6m、長さ0.5mのやや丸みのある焚き口からは、外側に向かって約0.5mの煙道部分が続く。煙道部分の底面はやや高い位置に保たれるため、そのとりつき部は段となっている（図100－ｄ断面）。焚き口部の両脇には基盤層から削り出して作られた土手状のせり出し部が残る。竈から煙道部の床面には、焼土と炭化物を多く含む７層（ｃ・ｄ断面）が形成されており、使用段階の堆積をみせる。また、その上面にあたる４～６層はやや明るい土層で少量の焼土を含むものに対して、１～３層ははやや暗い色調を示し焼土を含まない。少なくとも後者は住居廃棄後の堆積土であるが、前者の堆積時期に関しては決め手に欠ける。

遺物量はコンテナ0.7箱（１箱約28㍑）であるが、埋土から出土した弥生時代後期の小破片が大半を占め、当該期の土器は0.5袋程度（11号ポリ袋）である。須恵器の杯片が数点、土師

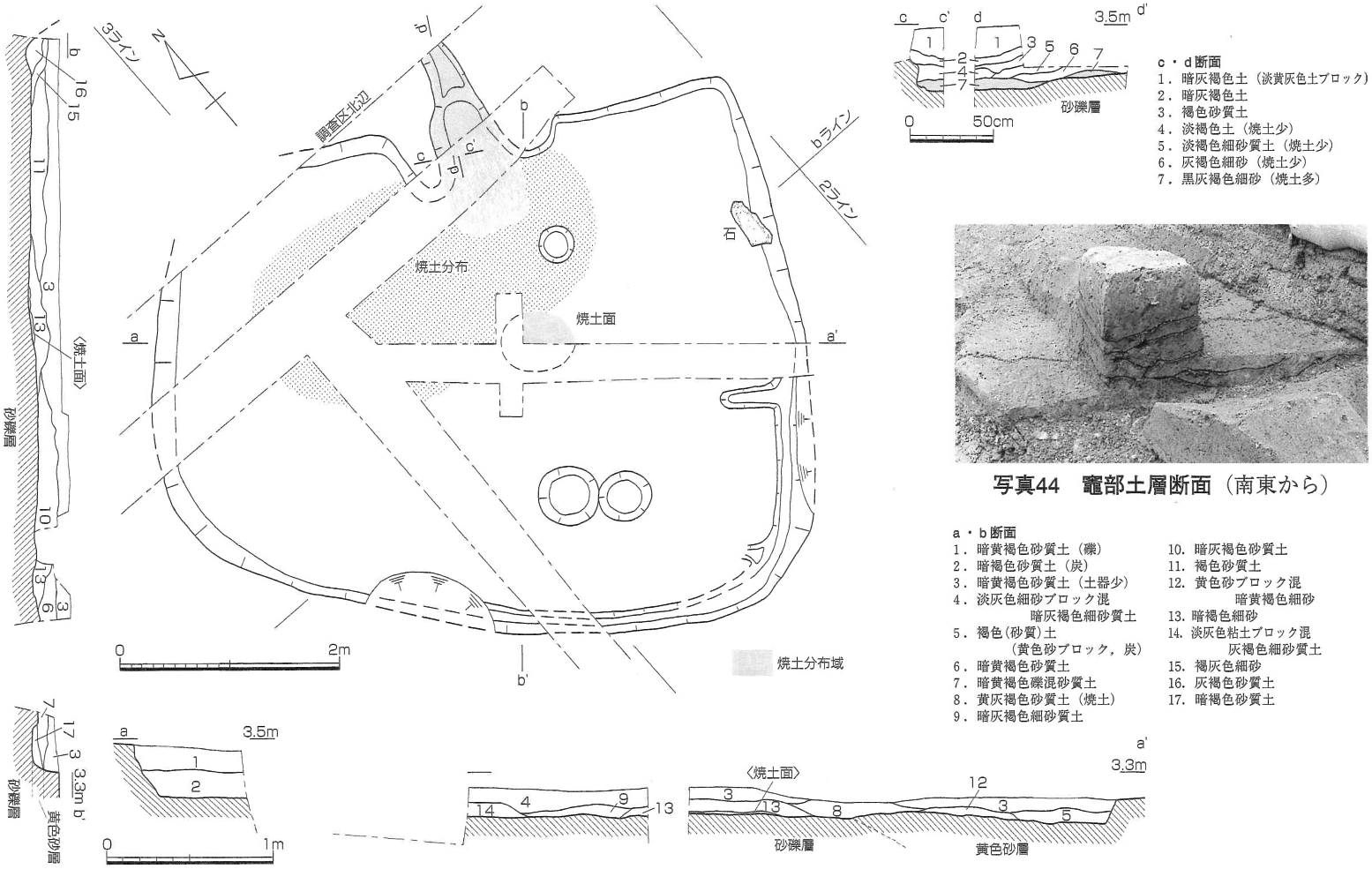


写真44　竈部土層断面（南東から）

図100　竪穴住居2（縮尺　平面図 1/60　断面図 1/40）

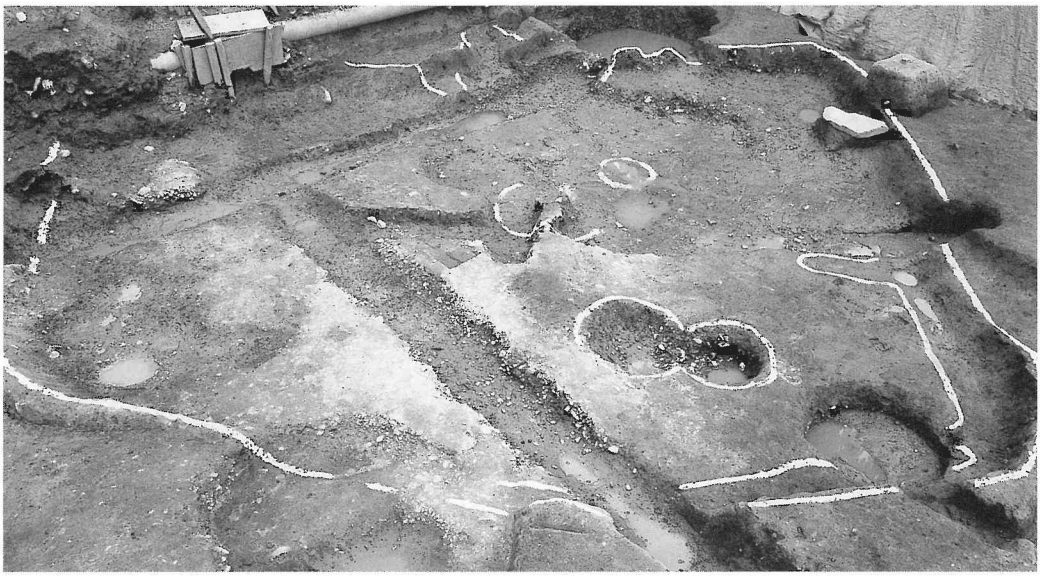
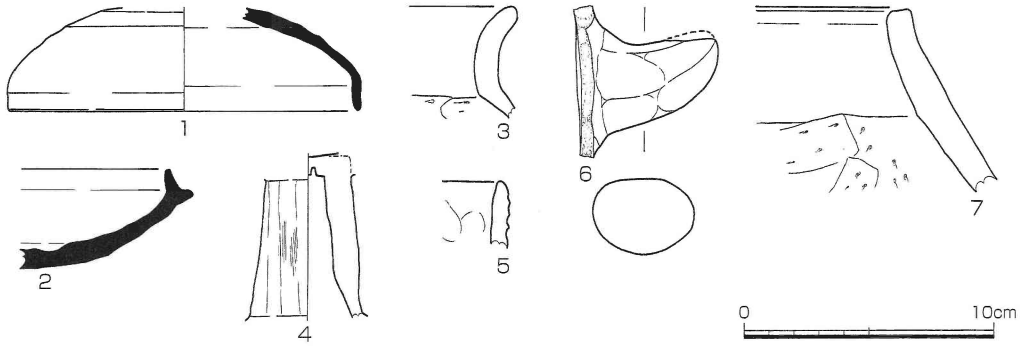


写真45　竪穴住居２　完掘状況（南西から）



番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	杯蓋	*14.1	－	－	篦削り範囲狭い。轆轤回転右。1/4残存	淡青灰色	粗砂少
2	杯身	－	－	－	篦削り範囲は底部のみ	灰褐色	微砂
3	壺	－	－	－	横ナデ。弥生土器	淡茶褐色	粗砂
4	高杯	－	－	－	外：面取りあり・ハケ。内：摩滅	橙褐色	微砂
5	製塩土器	－	－	－	外：平行叩き・被熱変色。内：ナデ	赤褐色。暗赤灰色	細砂多
6	甑	－	－	－	把手部分。外：ナデ・押圧・被熱痕。内：摩滅	橙褐色	粗砂～細礫多
7	竈形土器	－	－	－	口縁横ナデ。外：縦ハケ（幅1.5㎝程度）・被熱痕。内：篦削り	暗褐色。茶灰褐色	粗砂

図101　竪穴住居２　出土遺物（縮尺 1/3）

器の壺・高杯・甑・製塩土器の小片などが含まれる。その他に埋土下層から出土した鉄滓２点（図102－Ｍ５）が注目される。本住居では、前述したように、竈を有しつつ住居中央に焼土面を形成する。その残存状況が悪いため詳細は不明であるが、鉄滓の存在を考えると、鍛冶炉の可能性も指摘しておきたい。

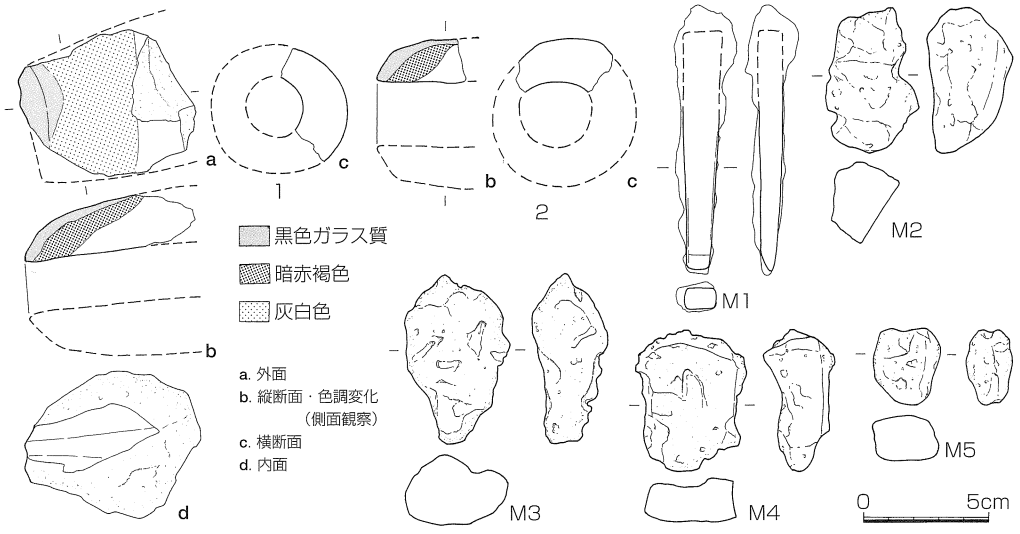
本遺構の時期は、須恵器の年代観（陶邑編年ＴＫ209）から、６世紀末～７世紀初頭の時期が考えられる。

b．焼土関連遺構（土坑他）・遺物

遺構面が極めて強い被熱を示すものや、焼土塊あるいは焼土粒を際だって包含する遺構を、調査区の南東域において、土坑２基と焼土分布域２カ所として検出した。前述した竪穴住居の南側に広がる区域である。その性格や時期は、共伴遺物も極めて乏しいことから、その具体的内容に言及することは困難であるが、いずれも何らかの形で焼土を伴うこと、周辺から出土した鉄滓などから、鍛冶の可能性を考えている。次に、個別資料をあげよう（図102、図版23）。

関連資料としては、竪穴住居２の鉄滓（図102－５）の他に、周辺の包含層から数点の鉄滓（同－Ｍ２～４）や鞴の羽口（同－１・２）の破片が出土している。鉄滓は、肉眼観察からは鍛冶滓の可能性が高い[1]。他に金属器では鑿（同－Ｍ１）が出土している。こうした状況を考慮すると、焼土関連遺構と鉄滓等との関連性を認め、鍛冶作業に関連した遺構であることを想定することはさほど唐突なものではなかろう。時期については、鉄滓が出土した住居２の時期を参考にすると、古墳時代後期（６世紀末～７世紀初頭）にあたる可能性が指摘される。さらに、遺構周辺に認められる住居１の存在を積極的に考えると、その上限に関してはもう少し遡る可能性もあろう。北側に住居、南に作業スペースが広がる状況が想定できる。

註１　光永真一氏の教示による。



番号	種別	出土地点	備　　考
1	鞴羽口	７層	復元外径 5.0 ～ 5.5 cm　復元内径 2.5 cm　胎土：径１～３㎜の石英を多く含む
2	鞴羽口	７層下半	復元外径 5.5 ～ 6.0 cm　復元内径 2.5 ～ 3.0 cm　胎土：径１～３㎜の石英を含む
M1	鑿	包含層	完形　推定長 9.6 cm　幅 1.4 cm　厚さ 1.0 cm　重さ 39.7g
M2	鉄滓	７層下半	鍛冶滓？　大きさ 5.9 × 3.7 × 3.4 cm　重さ 70g
M3	鉄滓	北側溝西半	鍛冶滓？　大きさ 6.8 × 4.2 × 3.0 cm　重さ 90g
M4	鉄滓	７層下半	鍛冶滓？　大きさ 5.7 × 4.4 × 2.9 cm　重さ 80g
M5	鉄滓	竪穴住居２	鍛冶滓？　大きさ 3.0 × 2.7 × 1.9 cm　重さ 20g

図102　焼土遺構関連遺物 ― 金属器他 ―（縮尺 1/3）

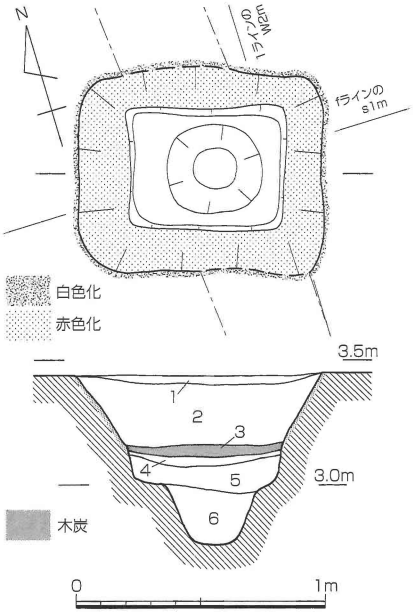
土坑35（図103、写真46）

本土坑は調査区の南端より、ｆ1区に位置する。調査時の側溝掘削で中央部が破壊される。

平面形は長方形を呈し、東西方向の長辺が１ｍ、南北方向の短辺が0.8ｍを測る。標高3.4ｍの検出面から深さ0.3ｍまでは約60度の角度で内側に落ち込み、逆台形の断面形を示した後、角度をほぼ垂直に近い状態に変化させて落ち込むため、変換点に肩部を形成する。肩部から0.2ｍ程度掘り込まれた標高３ｍ付近で平坦面に至る。同面は0.6×0.45ｍの広さを有し、検出面からの深さは0.5ｍである。さらに、同レベルにおいて土坑中央部にあたる位置に、直径約0.35ｍ、深さ0.2ｍのピットを確認した。その底面は標高2.75ｍに位置し、検出面からは0.7ｍの深さを有する。ただし、同ピットが本土坑に伴うかどうかは疑問が残る。今後、本土坑の性格あるいはその中でのピットの機能を考慮した上での検討が必要となろう。

本遺構で注目されるのは、肩部の位置より上方の壁面全面において、赤色化あるいは白色化が顕著に認められ、１～２㎝の厚さを有する焼土壁を形成している点である。同壁面には粘土が貼り付けられ、極めて強い被熱を受けたことを窺わせる。

埋土で特徴的なのは、肩部の位置に堆積する純粋な炭化物層（３層）で、３㎝前後の厚さで堆積する。３層以外に炭化物を顕著に含む土層は５層である。同土層は純粋な炭化物層ではな



1．黄灰褐色砂質土
2．暗黄褐色砂質土
3．炭層
4．茶灰色細砂質土（炭少）
5．黒褐灰色細砂質土（炭多）
6．茶灰色細砂質土（Mn少）

図103　土坑35（縮尺 1/30）

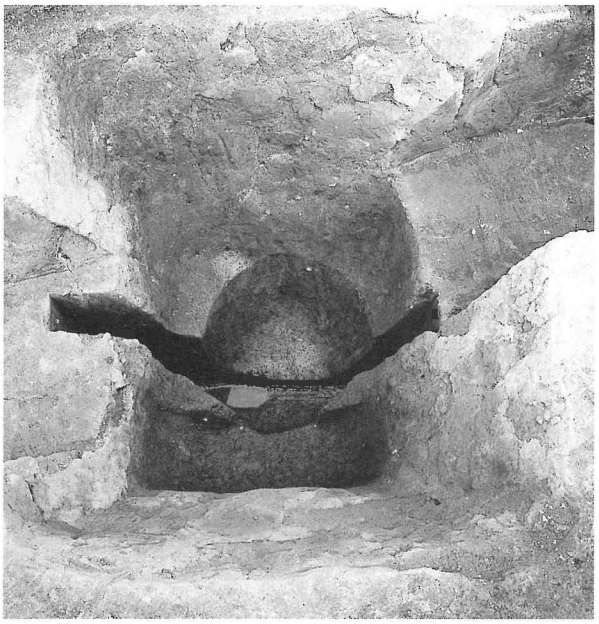


写真46　土坑35　完掘状況（西から）

いが、黒褐灰色の色調が示すように多量の炭の包含が確認されている。こうした点から、３～５層は本土坑が機能した際の堆積土と言えよう。一方、１・２層は廃絶時の埋土と考えられる。６層は４層と類似性が高い。

遺物は弥生～古墳時代初頭の土器小片が８片出土したのみで、本遺構の時期を決定するものは含まれないが、検出面などの状況から、古墳時代後期に属する遺構と考えたい。

ここで、注目したいのが窪木薬師遺跡の被熱土坑として報告され、その特徴から鍛冶用の炭材焼成窯とされる遺構である。報告[1]によると、その特徴は１ｍ内外の平面規模で箱形の掘り方断面形を呈し、粘土を貼り付けられた壁面や底面が被熱し、底面には炭が堆積する。平面形は、円形と方形との２タイプがある。時期は６世紀～７世紀前半とされる。また、深さは0.2～0.3mの残存が多いようである。それに対して、本土坑は、１ｍ程度の方形プランである点や粘土を塗布した壁面が強く被熱している点、あるいは炭化物を多量に含む点で共通性を示す。時期的にも問題はない。しかし、断面形態は逆台形で底面がやや狭い状態をなしている点や深さが0.5m（ピット部除外）と深い点に違いを見せる。深さの問題は遺構の上部削平の違いもあり、機能差の重要な問題点にはならないかもしれないが、底面の狭さや断面形はやや気にかかる点である。

以上のことから、本土坑の性格としては、鍛冶用炭材焼成窯と決定づけることには、やや躊躇せざるをえないが、その可能性は高いのではないだろうか。

註１　島崎東　1993　『窪木薬師遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86　岡山県教育委員会

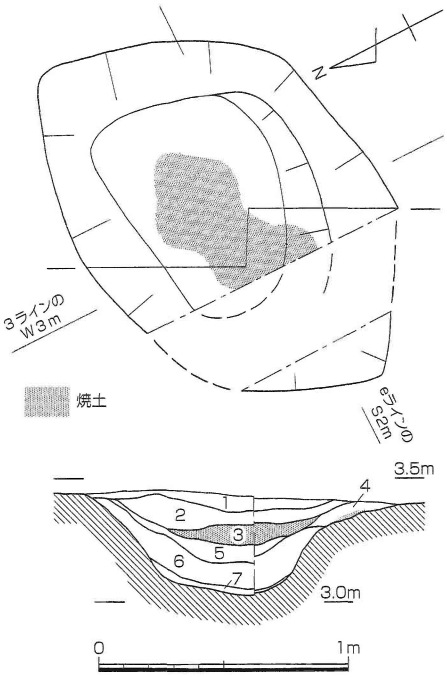
土坑36（図104、写真47）

本土坑は調査区の中央にあたるｅ4区に位置し、前述の土坑35と約10m離れる。

平面形は不整隅丸方形を呈し、東西方向の長辺が1.75m、南北方向の短辺が1.15mを測る。標高3.05m付近に位置する底面は丸みを有し、掘り方断面はやや丸味のある逆台形を示す。標高3.4m前後の検出面からは0.4mの深さである。

埋土は、堆積段階によって１層、２・３層、４～７層にまとめられる。埋土で特徴的なのは焼土を顕著に包含する２・３層である。２層は焼土塊あるいは焼土粒が炭化物と共に土層中に多量に含まれるに対して、３層は純粋な焼土のみが堆積する。壁面の被熱痕は認められないため、この場での焼成は考えにくく、投棄された多量の焼土が圧縮されたように状況が想定される。４～７層には焼土や炭化物が少量含まれるが、２・３層とは明瞭に違いを見せる。また、１層は流入土的堆積が考えられる。

遺物は、土坑35と同様に非常に少なく、１袋（11号ポリ袋）程度である。いずれも小片で実測に耐えるものはほとんどなく、甕の口縁部が１点あげられるのみである。



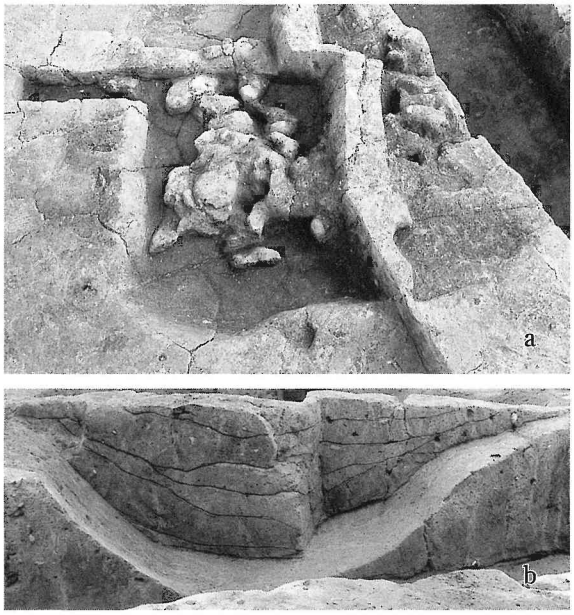
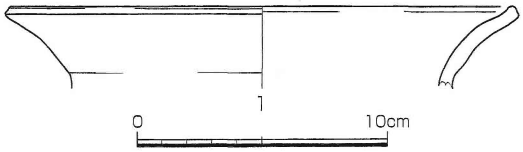


写真47　土坑36

a．焼土検出状況（南から）　b．土層断面（西から）

1．暗褐色砂質土（炭・焼土少）
2．暗赤褐色砂質土（焼土多，炭）
3．焼土層
4．暗灰褐色砂質土（炭・焼土少）
5．淡灰褐色砂質土
6．暗灰褐色（砂質）土（炭・焼土少）
7．灰褐色細砂



番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	甕	*20.3	−	−	横ナデ。1/6残存。シャープな仕上がり	明橙褐色	細砂

図104　土坑36・出土遺物（縮尺 1/30・1/3）

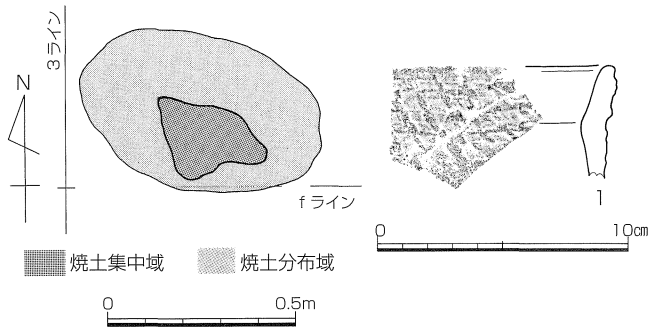
本遺構の所属時期は、土坑35を代表とする焼土関連遺構と同一時期の古墳時代後期の可能性を考えたい。

焼土分布域1（図105）

調査区の南東部にあたるe2区に位置する。前述の土坑35と土坑36の間に挟まれ、後者からは約3mの距離にある。

焼土は東西0.7m、南北0.4mの範囲に楕円を描くように薄く分布する。検出面は標高3.2mで、分布域の中央部分には、0.2〜0.3mの不整形の範囲に特に焼土が密集する。その厚さは中心部で1cm程度が確認される。

遺物は、周辺部から土器の小片が数点出土している。その中には古墳時代後期の製塩土器片が含まれる。また、焼土塊に混ざって、鉄滓が1点確認された。



番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	製塩土器	−	−	−	外：格子目叩き。 内：丁寧なナデ	淡黄白。黄橙灰白	細砂

図105　焼土分布域１・出土遺物（縮尺 1/20・1/3）

本分布域の性格に関しては、床面に被熱痕が認めがたいことから、炉床としては評価しにくいが、近辺での加熱作業痕跡としてとらえられる。所属時期に関しては、古墳時代後期の可能性が高い。

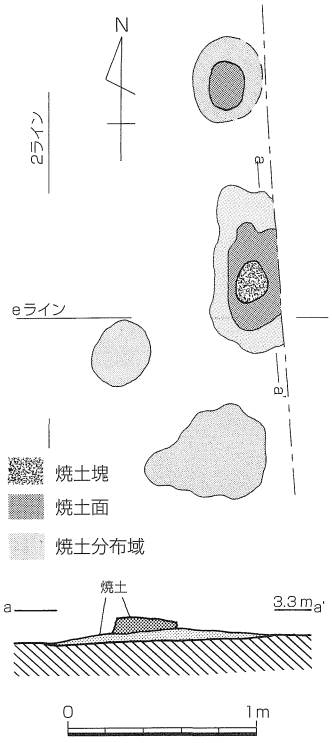


図106　焼土分布域２
（縮尺 1/40）

焼土分布域２（図106）

調査区の中央東端部にあたるｄ～ｅ1区に分布する。土坑35の北側約５ｍの位置である。

本分布域は南北1.5ｍ、東西0.8ｍの範囲に広がる。検出面は標高3.25ｍの高さである。その広がりの中で、上面が暗赤褐色を呈し焼土が集中する部分を４カ所で確認した。それぞれの広がりは、直径（一辺）0.25ｍ～0.5ｍの規模を有する。北側に位置する２カ所では、焼土分布域の中央部に、赤褐色あるいは明赤褐色を呈する焼土面を形成する部分を抽出することができる。焼土面の大きさは直径0.15ｍ程度あるいは約0.3ｍの広がりをもつ。本地点において被熱作業を行った痕跡の可能性があろう。また、中央部の分布域では、焼土面上にさらに焼土が堆積し、明橙色を呈する部分も認められる。ここでは、焼土の厚さは５㎝前後に達する。この集中部は、本分布域では最も広い分布域をもち、平面形態に関しても、他では円形あるいは不整形の焼土分布域を示すのに対して、やや方形の形状を示す点で違いを見せており、中心的存在であったことが予想される。

出土遺物は全く認められないため、こうした焼土集中部分がいつの段階に形成されたのかは不明であるが、周辺に広がる焼土関連遺構と密接なつながりを想定すれば、古墳時代後期の時期が考えられる。

5．古代・中世の遺構・遺物

古代に属する可能性が高い遺構は、掘立柱建物が２棟、耕作に関連すると見られる小規模な溝が12条、柱穴数基があげられる。

中世に属する遺構は、条里の方向に一致する溝１条があげられる。

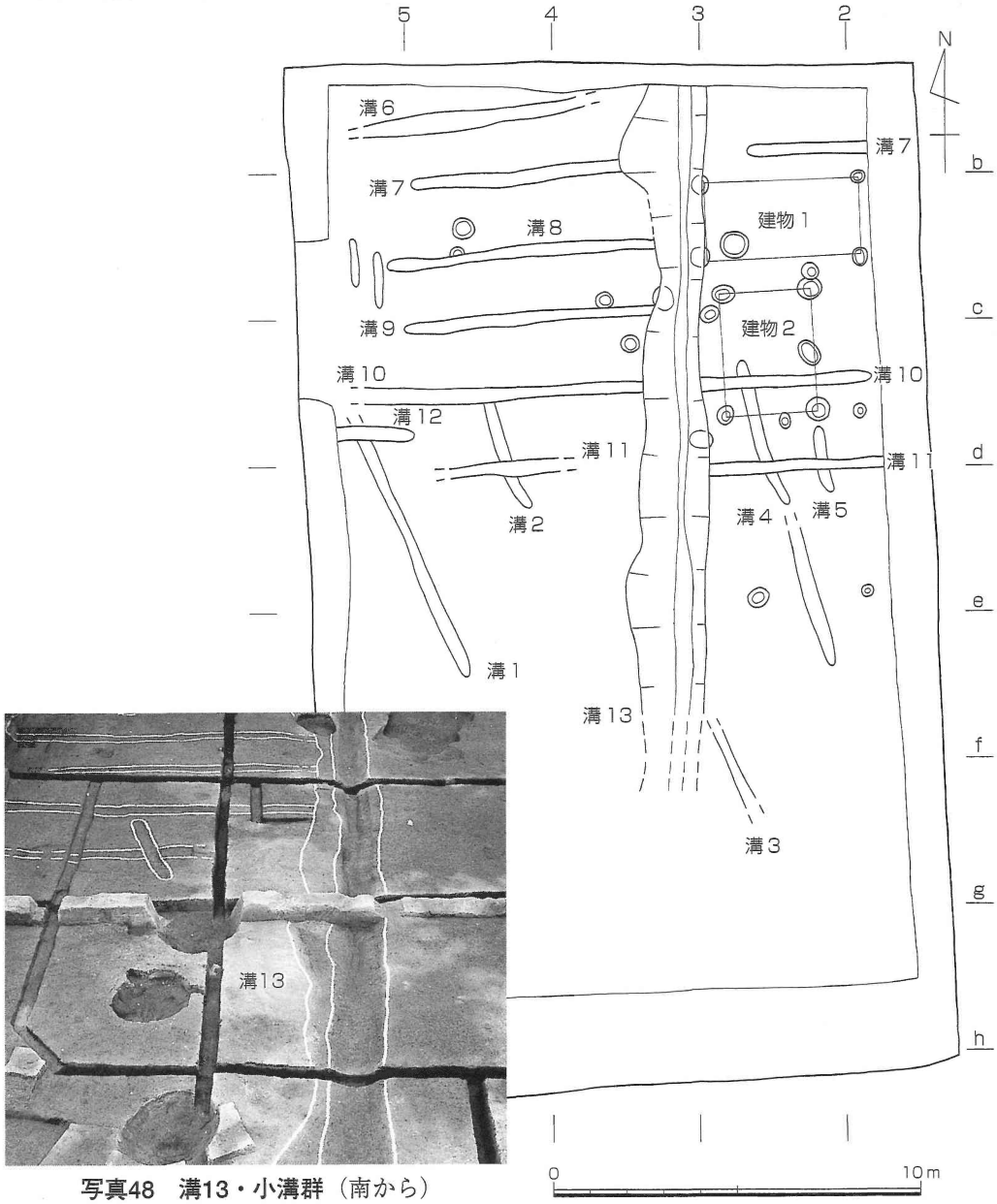


写真48　溝13・小溝群（南から）

図107　古代・中世遺構全体図（縮尺 1/200）

（1）古　　代

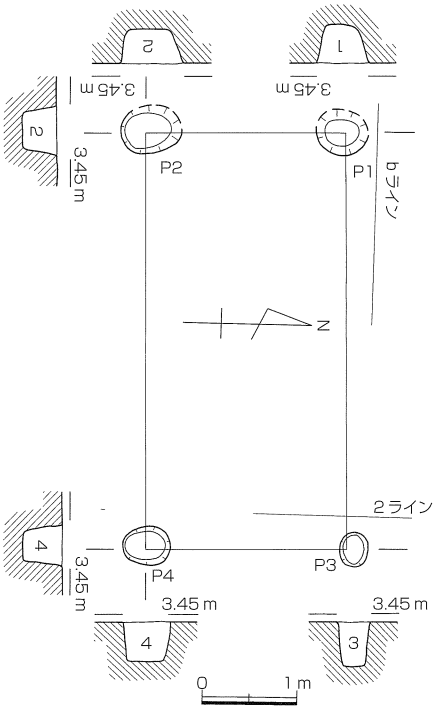
a．掘立柱建物

掘立柱建物1（図108）

調査区の北東部にあたるb1～2区に位置する。

検出面は標高3.4m前後で、4本の柱穴で構成される。柱穴間は南北方向が2.2m、東西方向が4.5mを示し、東西に軸を有する建物と考えられる。柱穴の大きさは、直径0.3～0.5m、深さは0.4～0.45mを測る。埋土は全体的には灰褐色系の砂質土が中心で、灰色細砂あるいは灰色土をブロック状に含むことが多い。また、P1やP2では下半が暗い色調へ変化する。柱穴間の距離に関して、梁間の距離がかなり長い点に疑問が残るが、柱穴の配置や断面形態の共通性が高いことから、建物として積極的に捉えた。

遺物はP2から土師器の細片が出土したのみである。遺構の所属時期を決定するのは困難であるが、柱穴の埋土や検出面から古代の可能性を考えている。



1．黄褐色砂質土（灰色土ブロック）
2．(暗)灰褐色砂質土（黄白色土ブロック，土器）
3．黄灰褐色砂質土（灰色細砂ブロック少）
4．暗灰褐色砂質土（灰色細砂ブロック少）

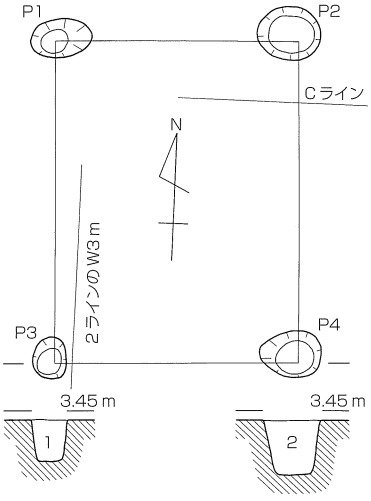
図108　掘立柱建物1（縮尺 1/80）

掘立柱建物2（図109）

調査区北東部のb1～2区に位置する。建物1の南側に長軸を90度振った状態で検出された。

検出面は標高3.4m前後で、4本の柱穴で構成される。柱穴間は東西方向が2.5m、南北方向が3.4mを示し、南北に軸を有する建物と考える。柱穴の規模は、直径0.4～0.5m、深さは0.4～0.6mを測る。埋土は灰褐色系の砂質土～土が中心で、建物1に特徴的な細砂ブロックなどは含まない比較的均質な土層である。P3・4の埋土は、下半が暗い色調へ変化する。

遺物は柱穴P1・3・4からそれぞれ小細片の土器が数点出土した。実測は困難であったが、P1から出土した古代の土師器片、P4から出土した黒色土器（内黒）の破片などから、遺構の所属時期は古代、平安時



1．褐色土（土器）
2．黄灰褐色砂質土（土器）

図109　掘立柱建物2（縮尺 1/80）

代の可能性が考えられる。

b．耕作関連遺構

調査区北半部に小規模な溝が12条検出された（図107）。北西－南東方向と東西方向の２タイプが認められ、遺構の切り合い関係から前者が古いことが判明した。幅0.3～0.5m、深さは５cm前後の規模で、２m間隔に平行して走る。建物などと同一面で検出されており、古い時期の土器細片も含まれるが、古代の耕作に関連する溝の可能性が考えられる。

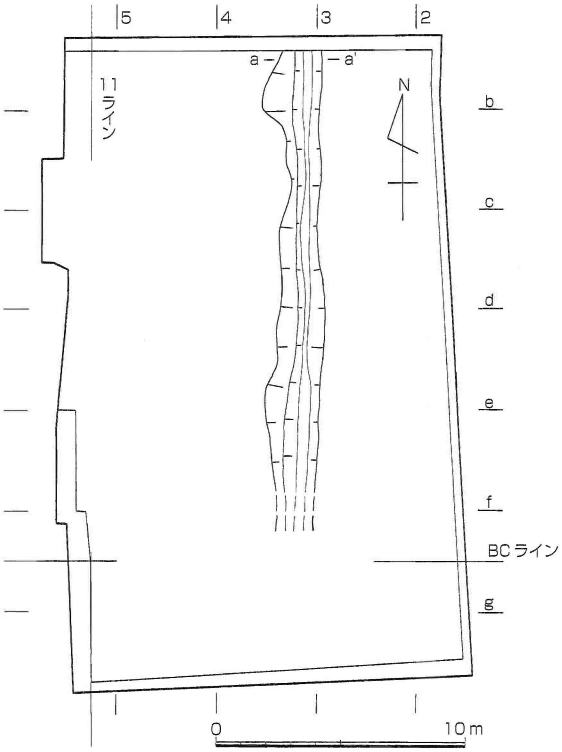
（２）中　　世

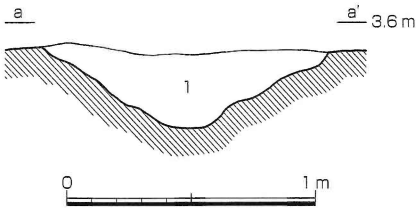
a．溝

溝13（図107・110、写真49）

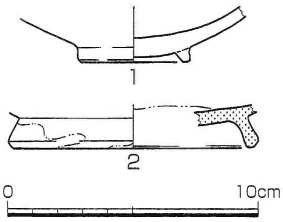
調査区のほぼ中央部、３ライン上を南北に走る溝である。ｆライン以南の南端部は、確認するこ

写真49　溝13　完掘状況（南から）





1．黄褐色砂質土



番号	器種	法量（cm）			形態・手法他	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	椀	－	4.5	－	吉備系土師器椀。ナデ・押圧。摩滅	白色	微砂。精良
2	白磁碗	－	＊10.0	－	高台外面・碗内面：施釉（淡黄緑色・薄い）。1/5残存	淡灰白色	精良。緻密

図110　溝13・出土遺物（縮尺　遺構 1/300・1/30　遺物 1/3）

とはできなかった。溝の規模は、幅1.5～2.5mで約21mの長さが残る。深さは、標高3.5mの検出面から0.4mを測る。底面は標高３m前後に位置するが、南に向けて1.5～２cmのレベル低下が認められ、緩やかに南流する可能性が窺われる。掘り方断面は丸みのある逆三角形を呈する。埋土は均質な単一土層である。遺物量は1.5袋程度（13号ポリ袋）で、中世の備前焼・土師器椀・白磁碗の小片を含むことから、鎌倉時代を中心とした段階に機能したと考えたい。

本溝の位置は、中心線が第３次調査地点に設定される南北の里境線から５町目の位置から約８m東（１町109m）にあたり、坪境には一致しない。ただ、方向としては条里の影響を窺うことができる。近世に踏襲されない点も含め、今後検討していく必要があろう。

６．近世・近代の遺構・遺物

近世および近代の時期には、本調査地点は耕作地として利用されている。検出遺構は、近世では土地造成に伴う段や畦畔、そして土坑４基である。

（１）近　　世

ａ．畦畔・段（図111～113、写真50）

本調査区内においては、少なくとも４段階にわたる土地の改変が確認された。

１段階は、６層上面に畦畔が形成される（図111）。畦畔の規模は幅0.5m、高さ１～５cmである。軸を正方位からやや東に振った状態で、３～４m間隔に認められる。調査区の西半部の畦畔は、次段階に切り込まれる段によって消失している。

２段階には、調査区中央部を北東－南西方向に走る段が形成される（図112）。前段階よりは東に向きを強める。この段は、６層上面が洪水砂に覆われた後に５層から７層にまで削り込まれて形成されており、高さは0.2～0.3mを測る。その他に土坑37・38が同一面で検出された。土坑38は段上に位置しており、より新しい段階に使用された可能性も考えられる。

３段階は、２段階に形成された段部分に盛り土がなされる（図113：トーン域）。その土層が４層であり、段の高い部分にとりつき畦畔状を形成する。比高差は0.15～0.2mを測る。同段階には土坑39・40が伴って検出された。

４段階には、３段階の盛り土が一部でカットされる（図113）。削り出しによって形成される点で３段階とは異なる。掘り下げ部分の比高差は、0.4m前後を測る。底面レベルも３段階のものよりも0.2～0.3m低い状況を呈する。底面には、東西方向の耕作痕が残されていた。

図111　近世遺構全体図１（縮尺 1/350）

写真50　近世遺構完掘状況（南から）

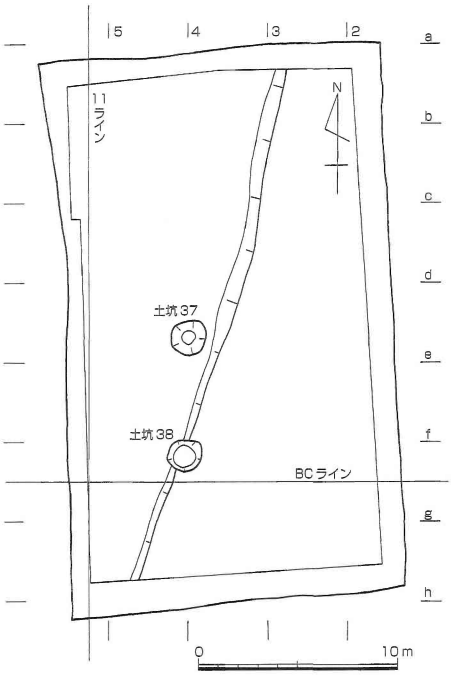


図112　近世遺構全体図２（縮尺 1/350）

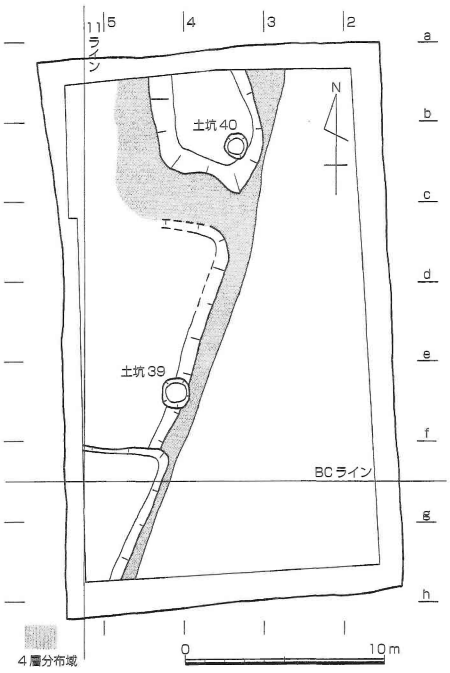


図113　近世遺構全体図３（縮尺 1/350）

b．土　坑

土坑37（図114、写真51）

調査区中央部西寄りに位置するd3区に位置する。5層上面で検出された。

平面形態は、直径1.96m～1.74mのほぼ円形を呈する。標高2.8mまで掘削された底面は、直径0.6mの小さな平坦面を形成する。標高3.5mの検出面からは、深さ0.75mである。掘り方断面は、標高3.1～3m付近までは比較的急峻な角度で掘り込まれ、以下は、角度を緩やかに転じて底面に至る。そのため、角度の変換点において小さな段あるいは屈曲部を形成し、全体的にはボール状の断面形に近い。

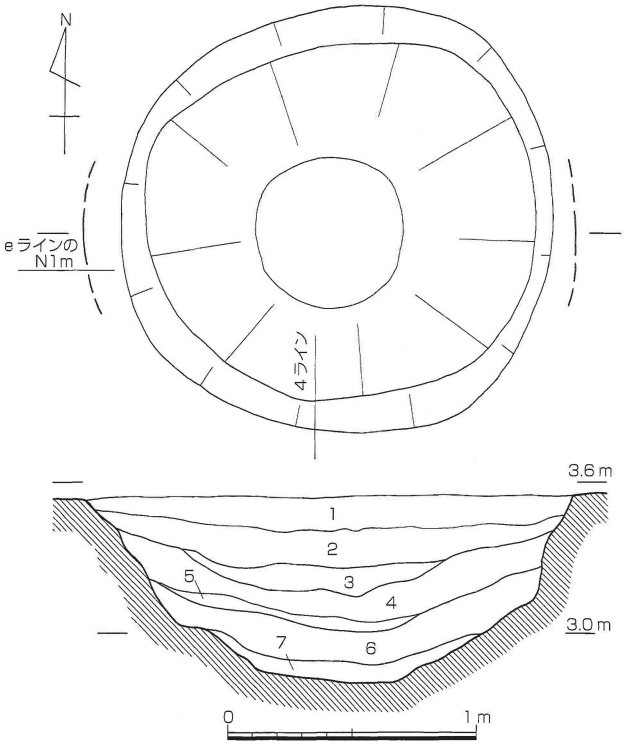


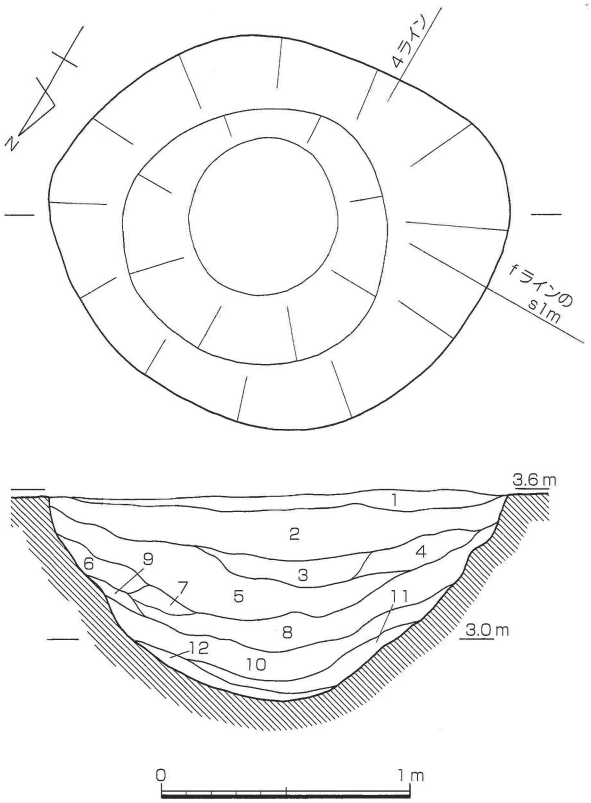
図114　土坑37（縮尺 1/30）

1．茶褐色細砂質土
　（灰白色細砂ブロック多，細礫）
2．（暗）茶褐色細砂質土
　（灰白色細砂ブロック多，細礫）
3．暗茶褐色土
　（灰色細砂ブロック多，細礫少）
4．茶灰色土（灰色土ブロック，Mn）
5．暗茶灰色土
　（灰白色細砂ブロック，Mn，Fe）
6．灰褐色土
7．暗茶灰色砂質土
　（黒褐色土・灰白色土ブロック，Mn）

写真51　土坑37　土層断面（南から）

埋土は全体的に灰(白)色の細砂あるいは土をブロック状に包含する特徴がある。1・2層は細砂質土で下層とは違いを見せ、7層は砂質土で灰白色土ブロックのほかに黒褐色土をブロック状に包含する点で3～6層とは比較的明瞭に分離される。堆積要因の違いが考えられる。

遺物は1袋程度（11号ポリ袋）が出土した。弥生時代から近世の遺物を含み、本土坑の時期は近世と考えられる。



1．黄褐色砂質土（細礫多）
2．褐色砂質土（細礫少）
3．灰褐色細砂混褐色砂質土
4．濃褐色砂質土
5．褐灰色細～粗砂
6．灰褐色砂質土
7．灰褐色粘質土
8．褐色粘質土
9．暗灰褐色粘質土
10．灰黄褐色粘質土
11．暗灰黄色粘質土
12．暗灰黄色粗砂

図115　土坑38（縮尺 1/30）

土坑38（図115、写真52）

本土坑は調査区の南西部にあたるf3～4区に位置する。5層上面で段を切るように検出された。

平面形は不整円形を呈し、直径は1.88×1.6mを測る。東西方向にやや張り出した形態である。底部は標高2.74mに位置し、緩やかにカーブする。深さは、標高3.55mに位置する検出面から0.82mを測る。掘り方の断面形は、ボール状を呈する。

埋土は、砂質の強い一群（1～6層）、粘質土である二群（7～11層）、粗砂の三群（12層）にまとめられる。一群では下層の5層は細～粗砂で形成されており、三群に共通する。こうした堆積順序は、前述の土坑37にも確認される。土坑の機能あるいは廃棄形態を考える上で注目できる。

遺物は全く出土していないが、検出面から近世の土坑と考えられる。

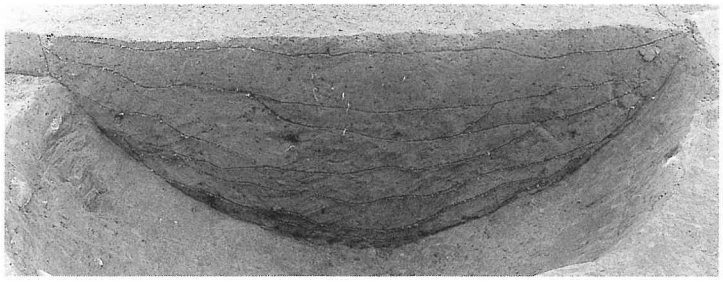
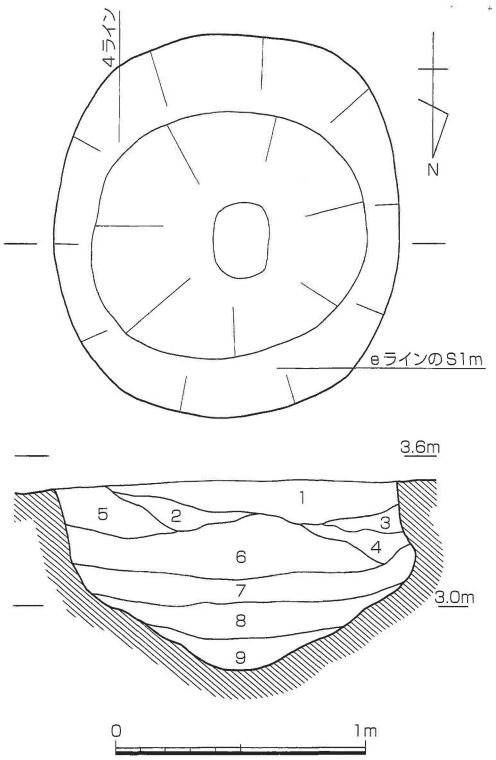


写真52　土坑38　土層断面（北西から）

土坑39（図116、写真53）



1．淡茶灰色細砂質土
2．茶灰色土
（黒色土ブロック少）
3．褐灰色土
4．茶灰色土
5．（暗）茶灰色細砂質土
6．茶灰色細砂質土
（黒色土・茶褐色細砂ブロック）
7．黒色土混茶灰色土
8．茶灰褐色(粘質)土
9．灰褐色粘質土

図116　土坑39（縮尺 1/30）

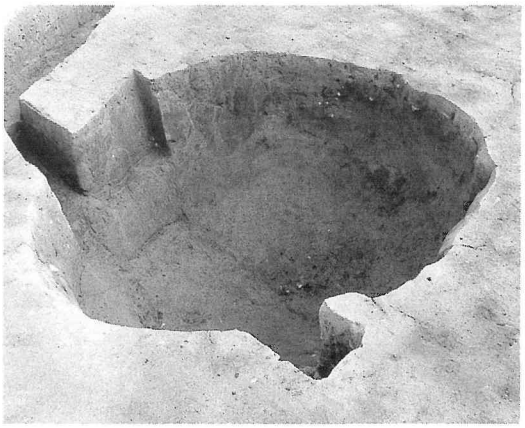


写真53　土坑39　完掘状況（北西から）

本土坑はｅ４区に位置する。

平面形は円形を呈し、直径は1.55m×1.4mを測る。標高2.72mまで掘削された底面は、わずか直径0.2～0.3mが確認できる程度の広さで、標高3.5mの検出面からは深さ0.78mとなる。掘り方断面は、標高3.1m付近までは垂直に近い急峻な角度で掘り込まれ、以下は、前述したように小さな底面に向けてすり鉢状を示す。角度の変換点においては屈曲部を形成するが、一部ではオーバーハングする部分も確認される。

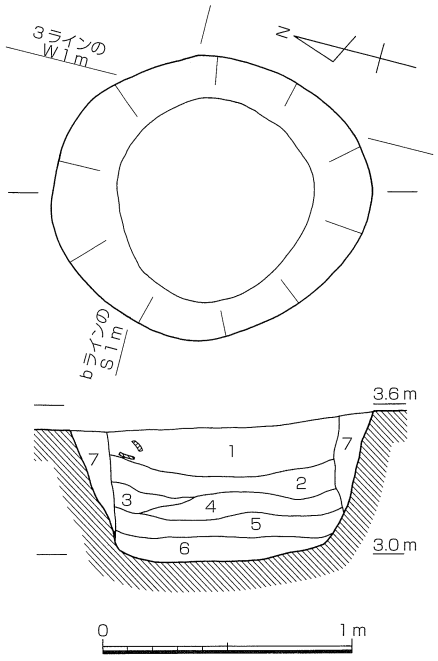
埋土は、最上層の１層が細砂質土で下層とは異なり、流入土の可能性がある。土層は下層に向けて粘質を強める。

遺物は土器の小片が数点出土した。備前焼の破片も含まれる。本土坑の時期は近世と考えられる。

土坑40（図117）

本土坑は調査区中央北よりにあたるｂ3区に位置する。

平面形は円形を呈し、直径は1.3m×1.15mを測る。標高2.96mまで掘削された底面は広く平坦で、直径0.8mの円形が確認される。標高3.5mの検出面からは、深さ約0.55mである。掘り方断面は、底部に向けて比較的急峻な角度で掘り込まれ逆台形を示す。また、土坑内に認められる１～６層と７層の堆積状況から、本土坑内には桶樋が据えられていたことが想定される。



1．茶灰色細砂質土（花崗岩バイラン土ブロック，軟質）
2．茶灰色土（花崗岩バイラン土ブロック，軟質）
3．茶灰色細砂質土（細砂多，灰色砂質土ブロック多）
4．灰色(粘質)土（茶灰色土ブロック多）
5．茶褐色土（細砂，灰色砂質土少，有機物）
6．濃茶褐色細砂質土（細砂多，有機物）
7．濃褐色土（灰色砂質土ブロック少）

図117　土坑40（縮尺 1/30）

桶枠内の土層群（1～6層）では、砂質の強い土層とやや粘質を強める土層が互層をなす傾向を示す。例えば、1・3・6層が前者であり2・4・5・7層が後者である。また、包含物が多く均質性を欠く点も特徴的である。最下層付近（5・6層）では有機物の包含が認められる。7層は桶枠の外側を埋めた土層である。

本土坑は、他の近世土坑37～39とは異なった状態を示す。掘り方断面形が、他では底面がすり鉢状あるいはボール状にかなりくぼんだ状況を呈するのに対して、平坦で広い底面をもつ逆台形を呈する点や、内部に桶枠という構造物を有する点、下半に堆積した土層には有機物を含む点など、他の土坑とは明らかに違いを見せる。こうした特徴から、本土坑は、いわゆる「野壺」として機能していたことが考えられる。

遺物は1袋程度（13号ポリ袋）が出土した。近世の瓦や陶器、備前焼の破片が含まれる。

本土坑の時期は近世と考えられる。

（2）近　　代

近代に属する遺構は、2層上面で検出した畝状遺構である（図118・写真54）

畝は約0.6m間隔で形成されている。その方向は、調査区の北東から南西にかけてのラインを境に、大きく変わっている。東半部においては北東－南西方向を軸としており、境界ラインと平行する。西半部においては、それに対して直交する方向で、東西方向が意識されている。また、上面レベルは、南西コーナーにおいて逆L字状に囲まれた落ちの部分では一段低くなっている。

この境界線は、古い時期に遡ると、近世段階に形成された段遺構のラインに一致しており、近世以降、この位置が土地区割りの境界となっていたことが分かる。南西隅の落ち部分のラインも同様に近世以降の地形を踏襲するものである。

また、畝の方向は、津島岡大遺跡では、南北方向に形成されるのが一般的であるのに対して、

写真54　近代遺構完掘状況（南から）

本地点では方向が全く異なる点は注目される。東西南北の正方位を軸とした区割りが乱れる場所であることが予想される。

時期は、直上に旧陸軍屯営地設置にともなう造成土が堆積していることから、明治40年までの耕作痕といえる。

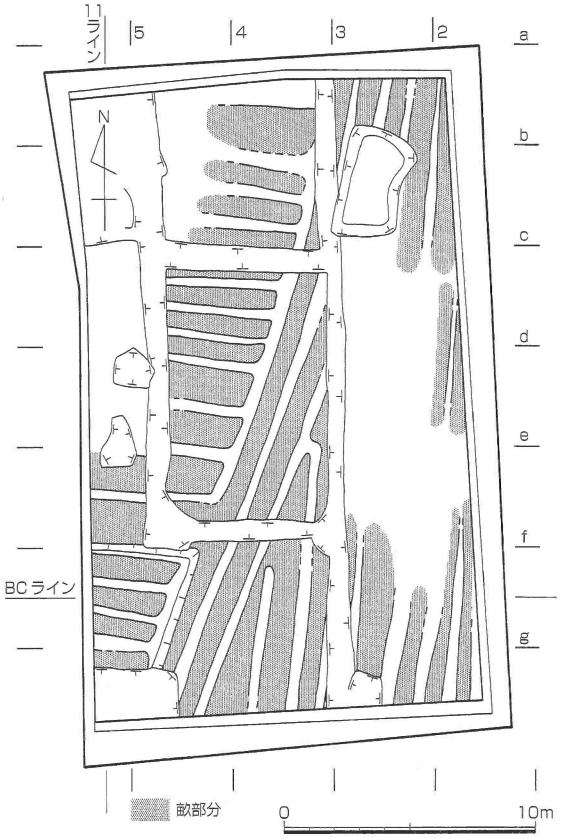


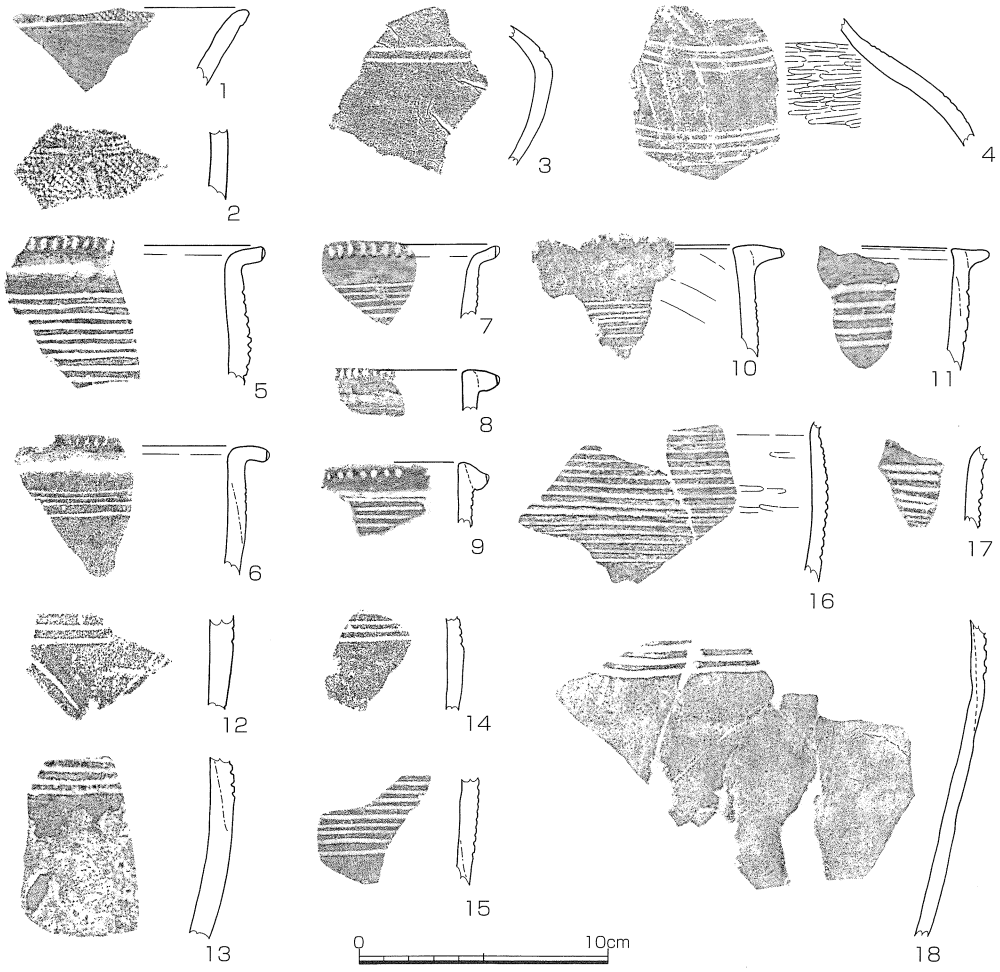
図118　近代遺構全体図（縮尺 1/300）

7．包含層出土の遺物

（1）縄文・弥生時代の土器

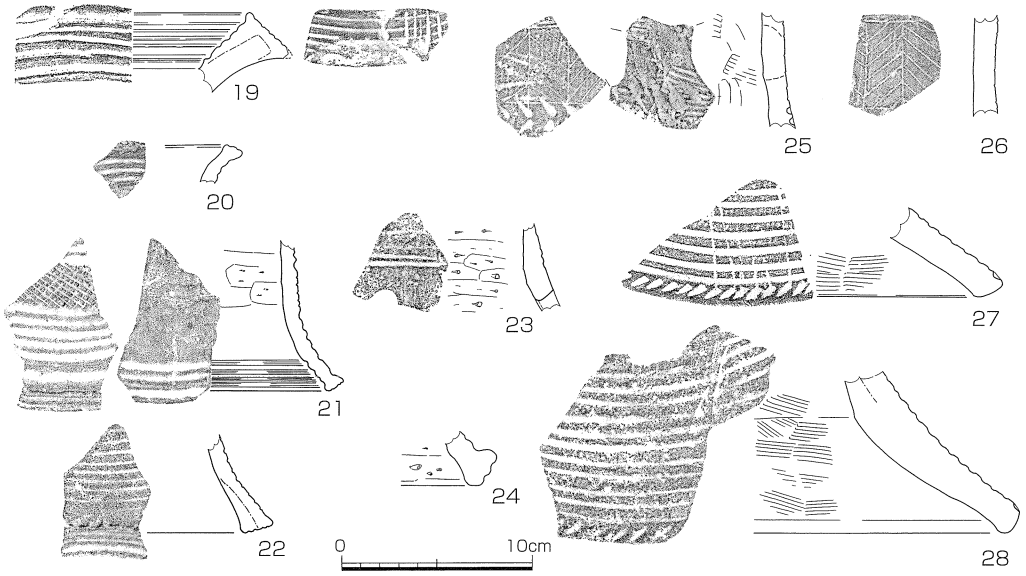
包含層出土の土器の中で、比較的古い段階に属するものとしては、縄文土器と弥生時代前期の土器（図119）を、そして、注目される器種として器台（図120）を、それぞれ抽出している。

縄文土器片は2点が確認された（図119－1・2）。時期は後期の深鉢の破片と



番号	器種	出土地点	形態・手法他	色調	胎土
1	縄文深鉢	包	内：横篦磨き。外：口縁端肥厚部に縄文・他は横篦磨き	灰黒色	微砂。均質
2	縄文深鉢	土11	内：丁寧なナデ。外：縄文。	淡灰褐色	微～細砂多。角閃石少
3	壺	土5	内：摩滅。外：横磨き・沈線2条・赤色顔料。　赤色粒	明黄褐色～赤橙色	細～粗砂。角閃石
4	壺	住1	内：篦磨き。外：ナデ・沈線(3条・4条)	明茶褐～暗赤褐	細～粗砂。角閃石
5	甕	包	内外：横ナデ。口縁刻目。沈線9条(断面V形)。外傾接合	暗茶褐色	微砂。精良
6	甕	包	内外：ナデ。口縁刻目(小)。沈線4条(浅・細)。外：煤。外傾接合	橙褐色	細砂少。角閃石
7	甕	包	内外：ナデ。口縁刻目。沈線5条(細)。外・煤。外傾接合	淡灰褐色	粗砂。角閃石
8	甕	包	横ナデ。口縁刻目。沈線1条確認	淡黄白～淡黄褐	粗砂
9	甕	土5	内外：ナデ。口縁突帯端部に刻目。沈線5条確認	明橙褐色	微砂。精良
10	甕	土11	内：工具ナデ。外：ナデ。口縁端に刻目(小)。沈線7条(細)	橙褐色	粗砂
11	甕	包	内：ナデ。口縁：横ナデ。外：縦工具ナデ。沈線5条(断面V形)。外傾接合	黄白(褐)色	粗砂少
12	甕	住1	ナデ。沈線文	暗褐色	微～細砂多
13	甕	包	摩滅・剝離顕著。外：縦工具ナデ・煤・沈線4条。外傾接合	黄褐色	粗砂～細礫
14	甕	包	ナデ。沈線4条(浅・シャープ)。外傾接合	黄灰白色	細砂
15	甕	包	内：横ナデ。外：縦ハケ(細)・沈線10条	褐色	粗砂。角閃石
16	甕	包	内：磨き？。外：ナデ・煤・沈線15条(篦の可能性あり)	黄褐色	粗砂。角閃石
17	甕	包	ナデ。沈線8条(雑・シャープ)	明褐色	微砂。角閃石多
18	甕	土5	内上半：丁寧なナデ。内下半・外：縦工具ナデ。外：沈線4条・煤	橙褐色。暗橙褐色	微砂。均質

図119　包含層出土遺物1（縮尺 1/3）



番号	器種	出土地点	形態・手法他	色調	胎土
19	器台	包	横ナデ。内：凹線５条。口縁：沈線６条・縦位に５条の線刻文。外面下半縦ハケ	赤橙褐色	微砂。角閃石
20	器台	包	横ナデ。口縁沈線２条。外面：沈線４条	黄白。(断)明橙褐	細砂。角閃石
21	器台	住２	外面：凹線２条・格子目文・凹線６条。脚端部：沈線２条（細）。 赤色粒少	橙褐。(断)黄褐	微砂。角閃石
22	器台	住２	内面：横ナデ。外面：摩滅・沈線９条。脚端部：沈線４条。 角閃石少	明橙褐色	微～細砂多
23	器台	住１	内面：篦削り。外面：剝離顕著・ハケ？・沈線４条・円孔１ヵ所残存。黒斑	橙褐色。黄褐色	微～細砂
24	器台	包	外面：凹線２条。脚端部：凹線２条	黄白褐色	粗砂～細礫
25	器台	包	内面：削り後ハケ。外面：縦ハケ・左右両端透かし穴・上端沈線２条・綾杉文	赤橙褐色	粗砂。赤色粒
26	器台	包	摩滅顕著。外面：綾杉文	橙褐色	粗砂。赤色粒
27	器台	包	外面：横ナデ・化粧土？・黒斑。28と近似。 赤色粒多・角閃石	灰黒色。黄橙褐色	微砂。細礫少
28	器台	包	摩滅。脚端部：横ナデ。外面：沈線・刺突文。27と近似。 角閃石	黒灰色。黄橙褐色	細砂～粗砂。赤色粒

図120　包含層出土遺物２（縮尺 1/4）

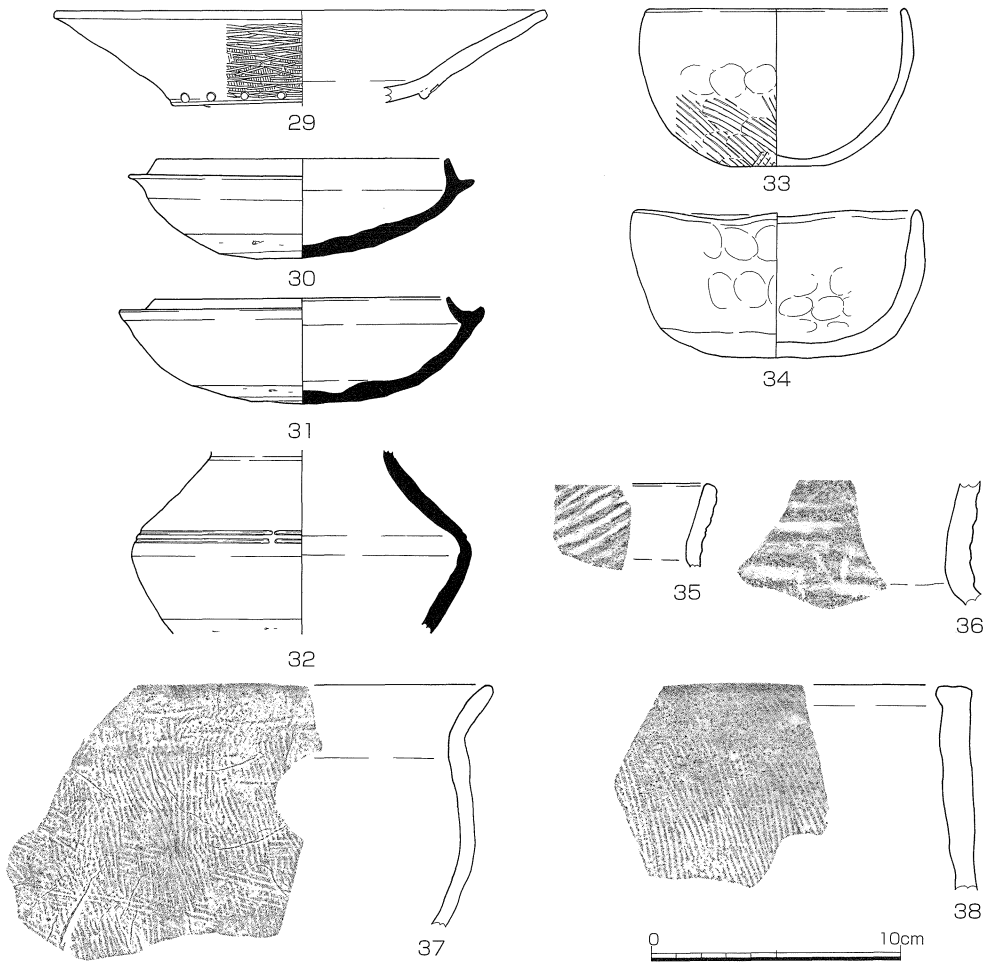
考えられる。

弥生時代前期の土器に関しては、実測可能なものはその大半を掲載した。後期の遺物量に比較すると極めて少ない量である。壺（図119－３・４)は少なく、甕（同－５～18）が主体をなす。口縁形態は如意状口縁と逆Ｌ字口縁の両タイプが含まれ、口縁下の沈線は多条化している。壺の１点（同－３）を除くと全て前期の新段階に属すると考えられる。

器台は、赤色の色調を呈し厚手のもの（図120－19)、褐色系の色調で厚手のもの（同－25～28)、白色系の色調で薄手のもの（同－21・22）などの存在が確認される。

（２）古墳時代の土器

古式土師器１点の他は古墳時代後期の須恵器・土師器・製塩土器をあげた（図121）が、後期土器は出土量が少ない。須恵器の時期は６世紀末～７世紀初頭であり、竪穴住居２の時期に一致する。製塩土器は厚手で叩き痕が明瞭に残っており、６世紀段階が考えられる。

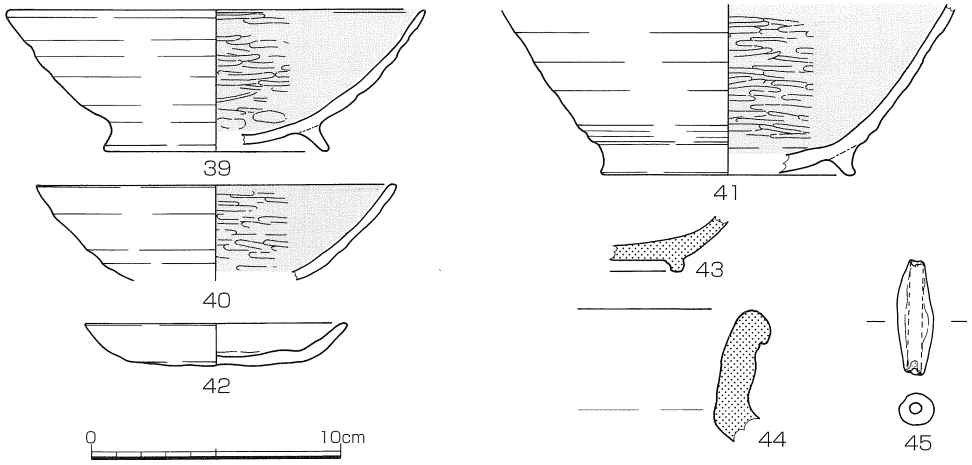


番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	出土地点	形態・手法他	色調	胎土
29	壺	19.6	−	−	包	外：ハケ後磨き・円形刺突文。内：摩滅。搬入品	明橙褐色	水流し粘土。精良
30	杯身	11.7	−	4.0	包	轆轤回転：右。1/2残存	灰白色	精良
31	杯身	*11.8	−	4.2	包	轆轤回転：右。1/3～2/3残存	灰。(断)紫灰褐	精良
32	壺	−	−	−	包	ナデ。篦描沈線2条。胴部下半：削り痕残存。1/3残	灰白色	微砂少。精良
33	鉢	*10.3	*4.0	6.3	包	内：丁寧なナデ。外：下半ハケ：上半押圧・ナデ。1/4残存	淡黄灰褐色	細砂
34	鉢	11.4	9.5	5.8	包	体部：押圧・ナデ・被熱(変色・剝離)。底外：ナデ。2/3残	黄橙褐色～黒灰色	微砂。細礫
35	製塩土器	−	−	−	包	摩滅。外：平行叩き。被熱変色	黄白色～赤白色	細砂
36	製塩土器	−	−	−	包	内：ナデ。外：平行叩き。被熱変色	黄白色～赤白色	細砂～粗砂
37	甕	−	−	−	包	内：丁寧なナデ。外：ハケ・押圧(表面凹凸)・被熱痕	赤灰褐色。赤褐色	細砂
38	竈形土器	−	−	−	包	内：押圧・被熱痕(煤多)。外：ハケ・上半はハケ後横ナデ	茶褐色。黒褐色	細砂。細礫少

図121　包含層出土遺物3（縮尺 1/3）

（3）古代・中世の土器

古代に属する土器は非常に少ない。その中で、黒色土器（図122－39～41）の存在は注目される。出土した黒色土器はいずれもA類（いわゆる内黒）で胎土は精良である。10世紀に属す



番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	出土地点	形態・手法他	色調	胎土
39	椀	*16.8	*9.0	5.6	包	黒色土器（内黒）。摩滅で黒色劣化。1/4残存。 角閃石？多	黒灰色。橙褐色	微～細砂。赤色粒
40	椀	*14.4	－	－	包	黒色土器（内黒）。外面：横ナデ。1/4残	黒色。暗橙褐色	微砂。雲母。均質
41	椀	－	*10.2	－	包	黒色土器（内黒）。内面：磨き・摩滅。1/4残。 胎土精良	黒色。褐～赤褐色	微砂少。角閃石
42	小皿	*10.6	*7.0	10.2	包	底部内面：横ナデ後押圧。底部外面：押圧。1/4残。 胎土精良	淡黄白色	微砂少。角閃石
43	碗	－	－	－	包	灰釉陶器。内：施釉。高台丸味	(釉)緑色。灰白色	竪緻
44	甕	－	－	－	包	備前焼。横ナデ	赤銅色～灰黒色	竪緻

番号	器種	最大長・最大径(cm)	地点	形態・手法他	色調	胎土
45	土錘	4.6・1.4	包	押圧・ナデ。穿孔径約5㎜	橙褐。(断)黄白	微砂。均質

図122　包含層出土遺物4（縮尺 1/3）

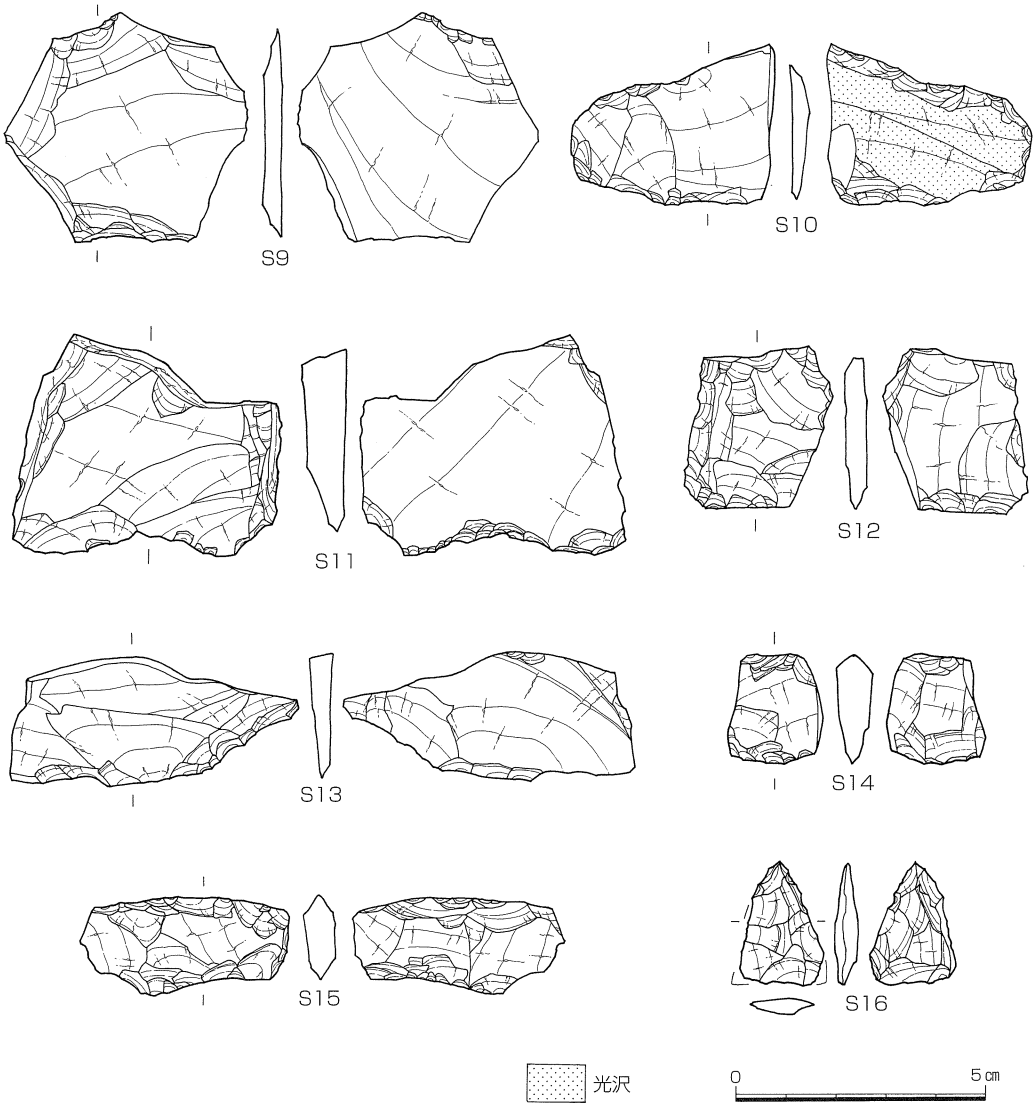
ると考えられる。その他には灰釉陶器（同－43）が認められた。

中世に関しても、出土遺物は少なく、実測可能なものは備前焼の甕（同－44）程度である。時期は鎌倉時代後半が考えられる。

（4）石　　器

石鏃（図123・124－S16・17、図版23）2点出土しており、ともに平基式で一部が欠損しているもののほぼ完形である。いずれも、薄い剥片を素材とし周囲から薄く剥離されているが、あまり丁寧に行われておらず、ややいびつなかたちをする。また、剥離は鏃身の中央付近まで及んでおり、素材面をほとんど残していない。

スクレイパー（図123－S9～11・13、図版22）S9は非常に薄く剥片した剥片の末端付近の一部に、若干の調整を加えて刃部としている。S10は、一方の表面が著しく摩滅するとともに、わずかに光沢がみられる（スクリントーン部分）。打製石包丁の使用痕と類似しており、その転用品であると考えられる。また、側縁の1辺には剪断面をもつ。S11は、石核を転用したスクレイパーである。石核は剥片を素材とし、素材面を一方の面に大きく残している。3辺に剪断面または折れ面をもつ。剪断面は石核の作業面を切っており、剥片剥離作業を行なった後に行われている。1辺に若干の調整を行って刃部をつくり、スクレイパーとしている。S13は刃

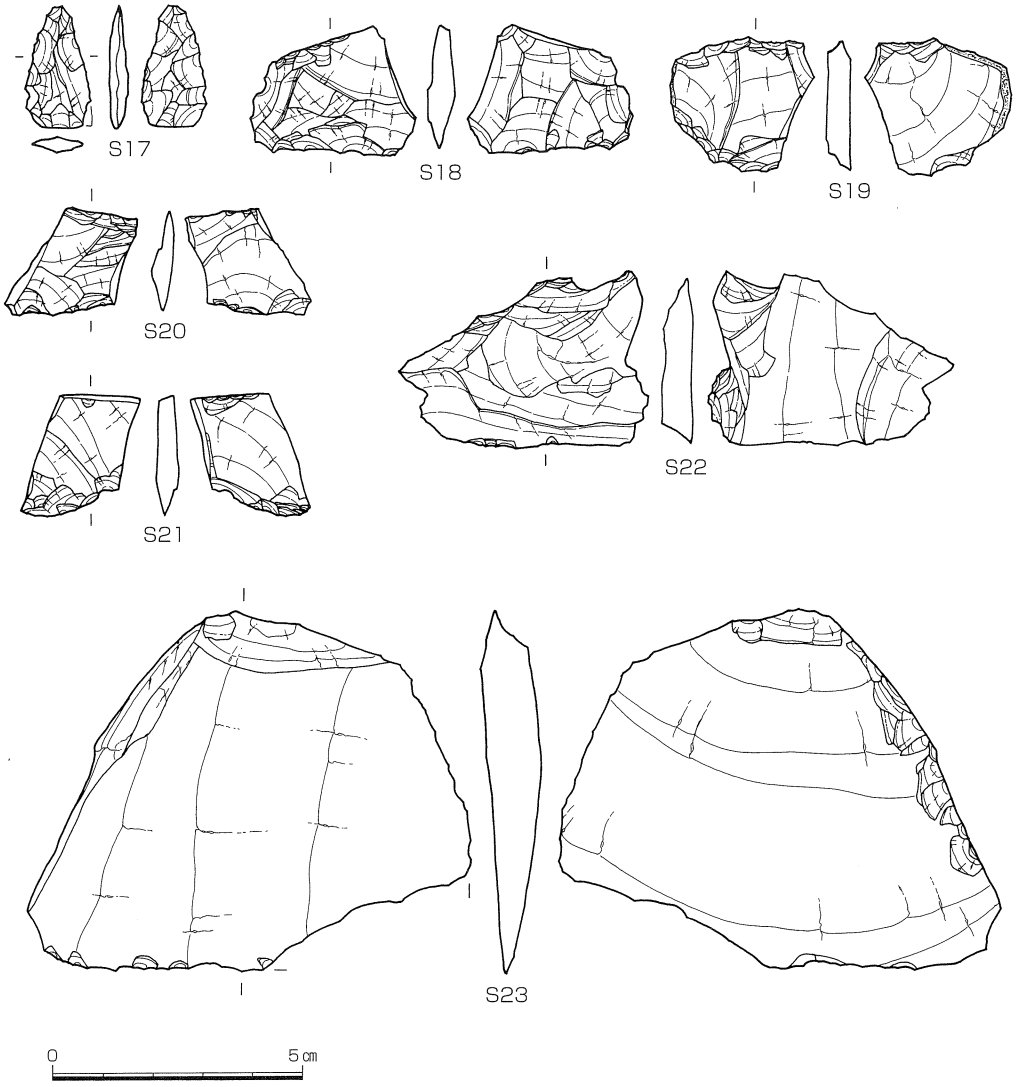


番号	器　種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	特　　徴
S9	スクレイパー	5.5	4.8	0.50	11.3	サヌカイト	刃部は粗雑な片面調整。
S10	スクレイパー	3.2	4.05	0.50	7.4	サヌカイト	表面に顕著な摩滅あり。打製石包丁の転用。
S11	スクレイパー	4.4	5.3	1.07	28.5	サヌカイト	石核の転用。
S12	楔形石器	3.25	2.95	5.05	6.7	サヌカイト	1面に剪断面あり。
S13	スクレイパー	2.65	5.75	1.07	10.8	サヌカイト	1辺に粗い2次調整。他の3面は剪断面。
S14	楔形石器	2.3	1.9	0.71	4.1	サヌカイト	2側面に剪断面あり。
S15	楔形石器	2.0	4.3	0.70	5.7	サヌカイト	
S16	石　鏃	2.5	(1.7)	0.43	(1.5)	サヌカイト	平基式。側縁・基部の一部が欠損。

図123　包含層出土遺物5 ― 石器 ―（縮尺 2/3）

部以外の2辺に剪断面をもつ。

楔形石器（図123・124－S12・14・15・18～21、図版22）楔形石器は合計7点出土しており、出土数が最も多い。本調査で出土した石器全体の中でも、34%を占めており、高い割合を示し



番号	器　種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	材　質	特　　徴
S17	石　鏃	2.4	(0.8)	0.37	(1.0)	サヌカイト	平基式。素材面をほとんど残さない。基部の一部欠損。
S18	楔形石器	2.55	3.3	0.60	5.6	サヌカイト	1面に剪断面あり。
S19	楔形石器	2.6	2.9	0.52	4.8	サヌカイト	1面に剪断面あり。自然面を残す。
S20	楔形石器	2.05	2.6	0.60	2.4	サヌカイト	2面に剪断面あり。
S21	楔形石器	2.4	2.4	0.64	3.9	サヌカイト	3面に剪断面あり。
S22	石　核	3.5	4.9	0.73	12.1	サヌカイト	表裏両面で周縁から剥離作業を行う。
S23	R.F.	7.0	7.0	1.16	66.7	サヌカイト	側縁の一部に2次調整あり。

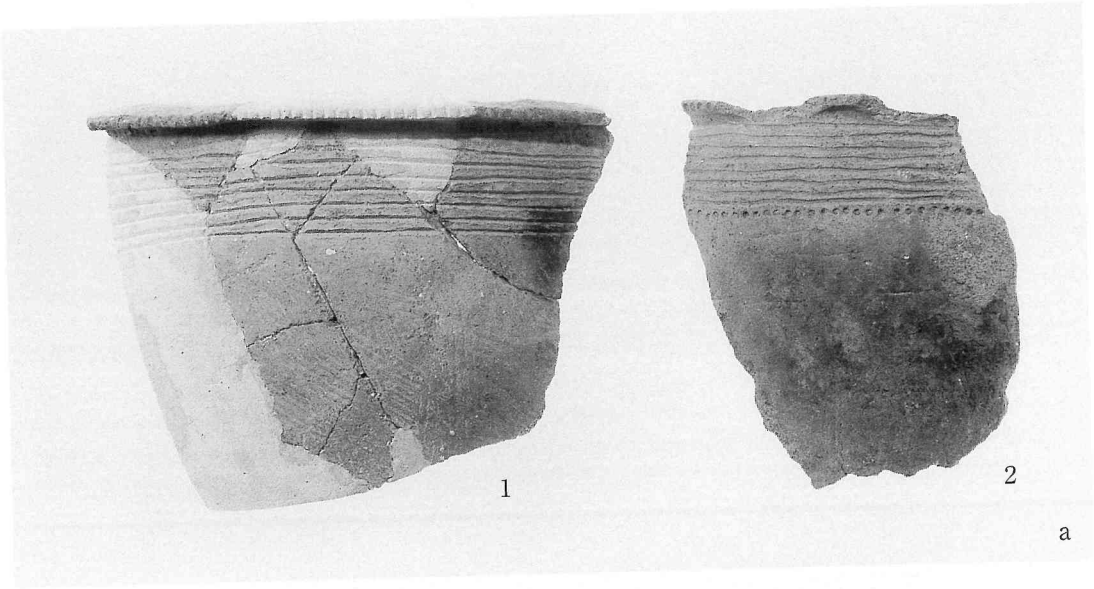
図124　包含層出土遺物6 ― 石器 ―（縮尺 2/3）

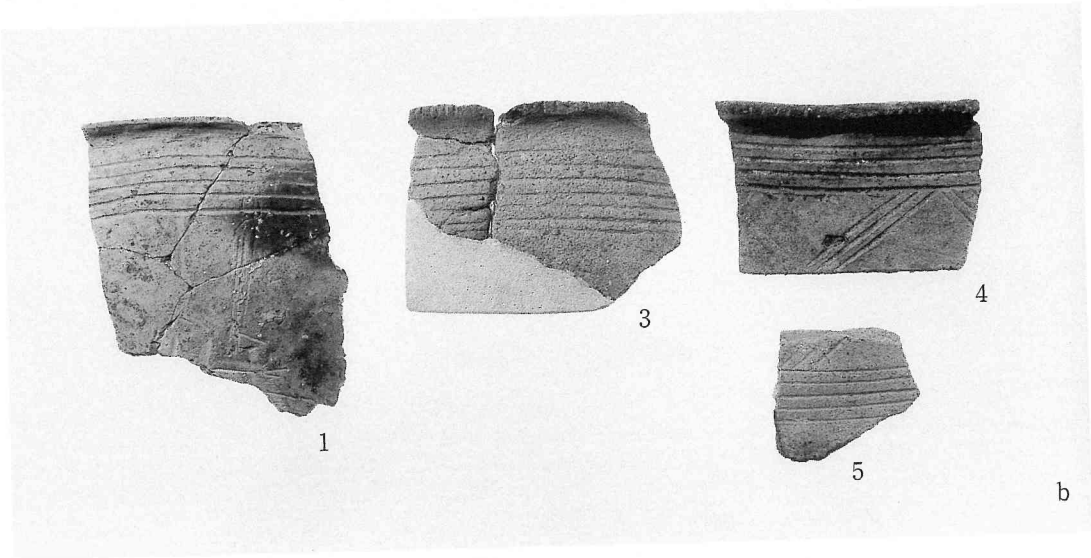
ている。出土した楔形石器は、いずれも小型で最も大きいもの（S12）でも、長さ3.25cm、幅2.95cmである。また、剪断面をもつものが多く、1側縁にもつもの（S12・18・19）、2側縁にもつもの（S14・20）、さらに2側縁と上端にもつもの（S21）などがある。上下両端はほとんどのもので、潰れが著しい。

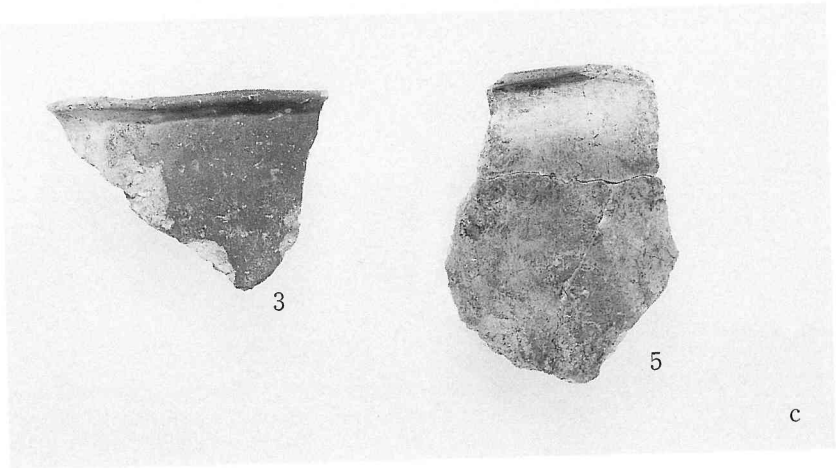
加工痕をもつ剥片（図124－S23、図版23）薄い剥片の末端付近にわずかに加工痕を認めることができ、そこを刃部として利用していたと思われる。比較的大型の剥片が利用されており、長さ幅とも7.0cmある。一方の側縁は折れ面であり、そこを打面としてわずかな加工が施されているが、刃部を形成するにはいたっていない。

石核（図124－S22、図版23）板状の剥片を素材としている。剥離は表裏両面の周囲から節理に沿って行われている。

図版一　弥生前期土器







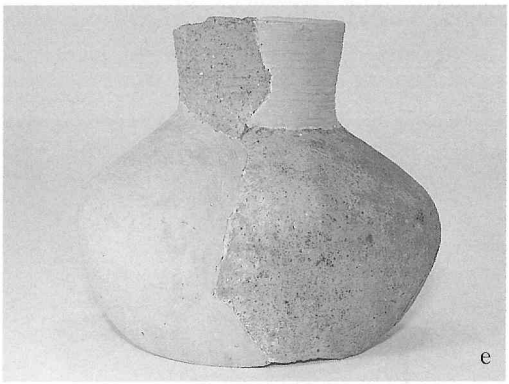
a．土坑１
b．土坑２
c．土坑１
（×1/3）

図版二　弥生後期土器1（壺）

（×1/4）　土坑14－1

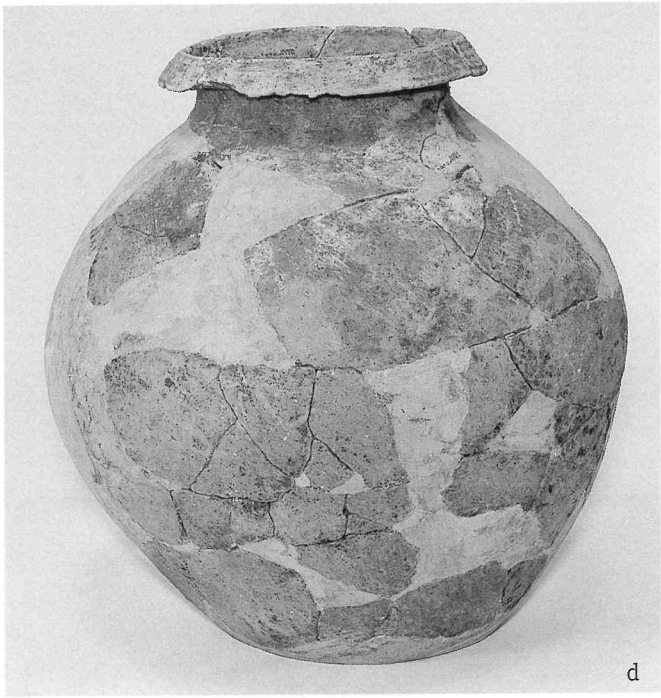
（×1/4）　土坑11－9

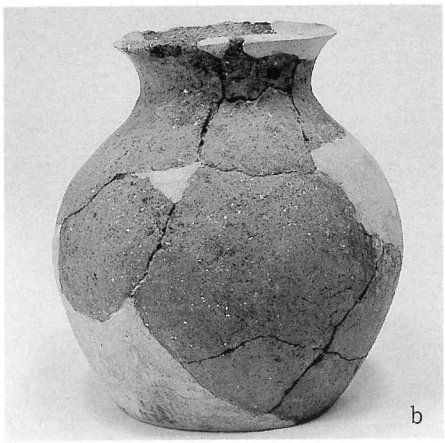
図版三　弥生後期土器2（壺）

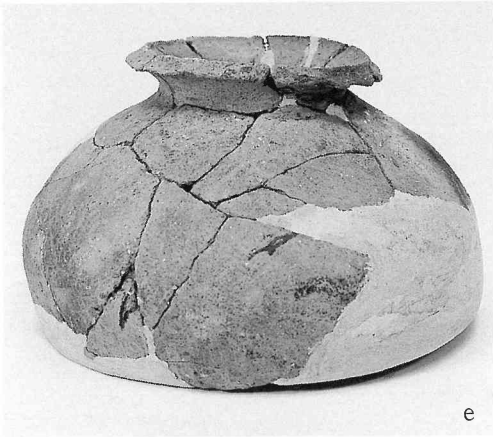


a．土坑13－1　　d．土坑８－３
b．土坑23－1　　e．土坑11－1
c．土坑８－1　　f．土坑30－1
（c：×1/6，その他：×1/4）

図版四　弥生後期土器3（壺）





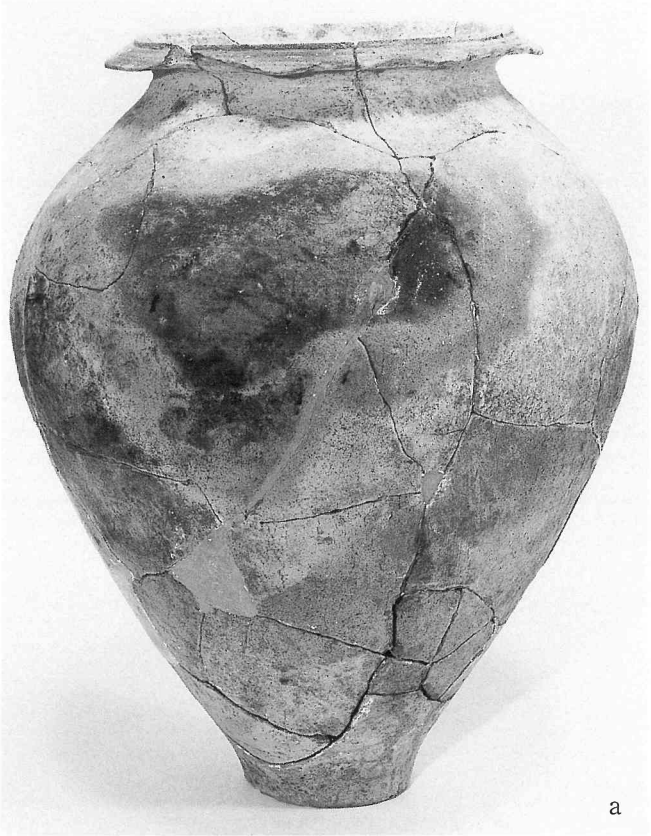


a．土坑７－５
b．土坑８－５
c．土坑８－６
d．落ち－９
e．土坑７－２
f．土坑７－１
（×1/4）

図版五　弥生後期土器4（甕）

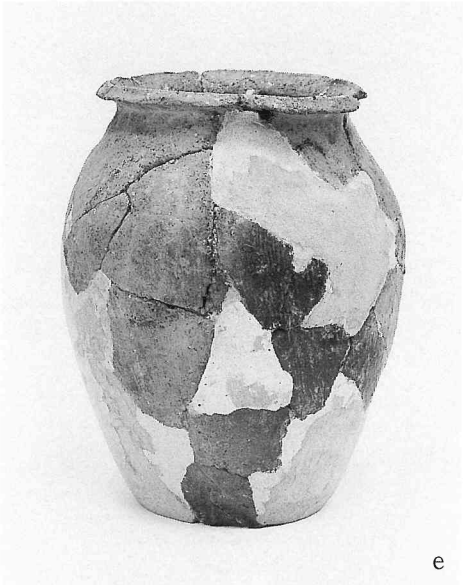
a．土坑14－2　　d．土坑8－7
b．土坑11－2　　e．土坑12－2
c．土坑11－4　　（×1/4）

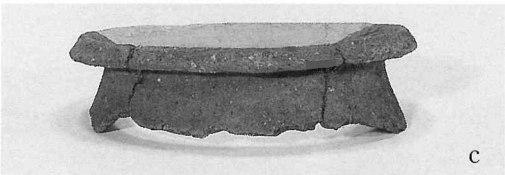
図版六　弥生後期土器5（甕）



a．土坑14－3
b．土坑13－9
c．土坑13－8
d．土坑13－3
（×1/4）

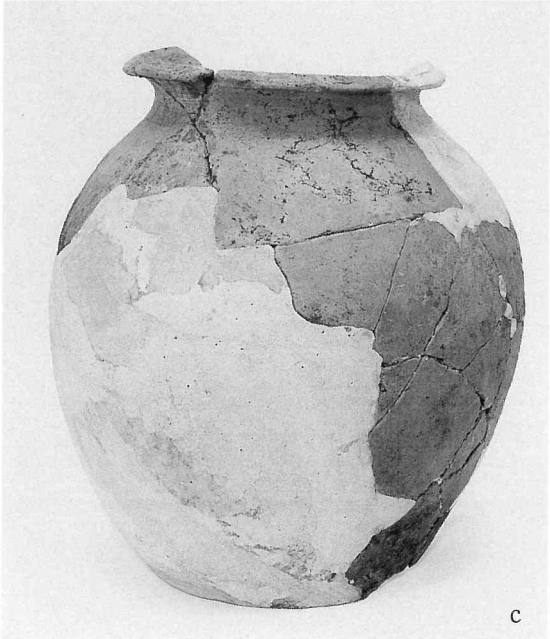
図版七　弥生後期土器6（甕）





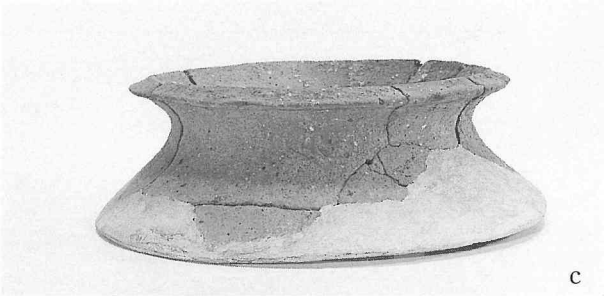
a．土坑８－８　　d．土坑８－４
b．土坑26－１　　e．土坑７－16
c．土坑５－13　　f．土坑７－12
（×1/4）

図版八　弥生後期土器7（甕）



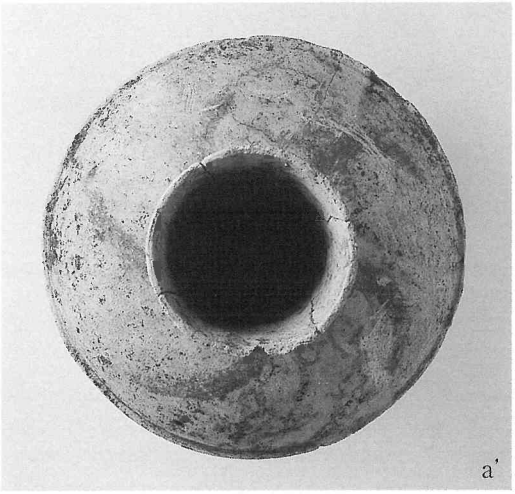
a．土坑7－7　　c．土坑7－8
b．土坑7－6　　d．土坑7－15　（×1/4）

図版九　弥生後期土器8（甕）



a．土坑29－3　　d．土坑29－6
b．土坑29－4　　e．土坑29－5
c．土坑30－4　　f．土坑20－1
（×1/4）

図版十　弥生後期土器9（直口壺・台付壺）



a．土坑７－21　　b．土坑５－１
a'．　〃　（上から）　c．土坑５－２
d．土坑７－21・22　　（a～c：×1/4）
（※壺と高杯の大きさ比較写真）

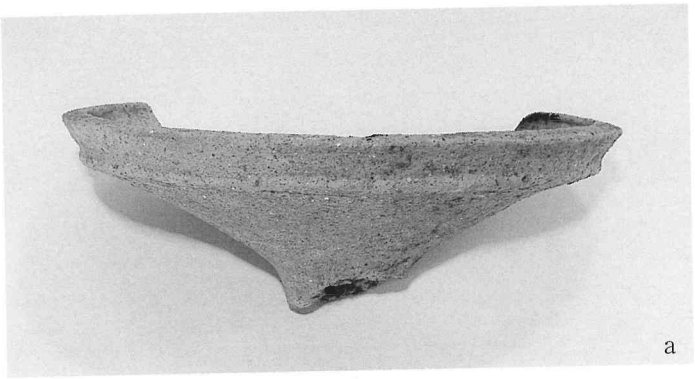
図版十一　弥生後期土器10（高杯）

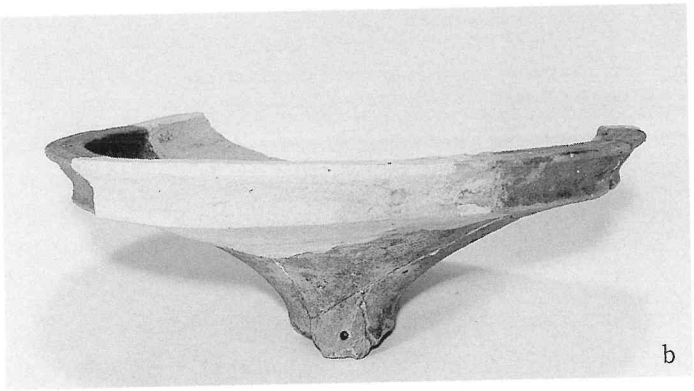
土坑10－14

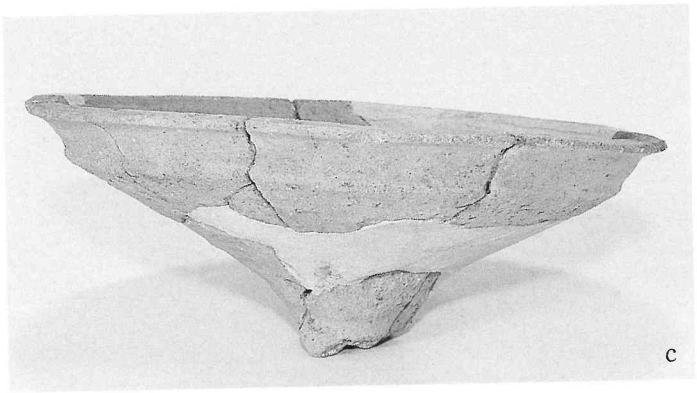
土坑７－22

（×1/3）

図版十二　弥生後期土器11（高杯）







a．土坑20－4
b．土坑6－11
c．土坑29－12
d．土坑18－15
e．土坑5－25
f．土坑29－13
（×1/3）

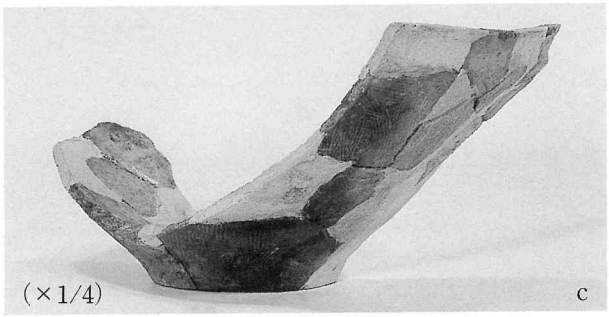
図版十三　弥生後期土器12（高杯）

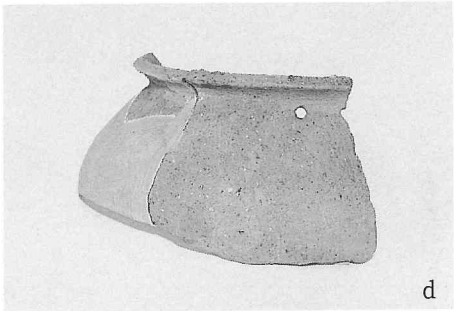
a．土坑18－17
b．土坑30－ 7
c．土坑20－ 6
d．土坑21－ 3
e．土坑18－16
f．土坑 6 －12
g．土坑20－ 5
（×1/3）

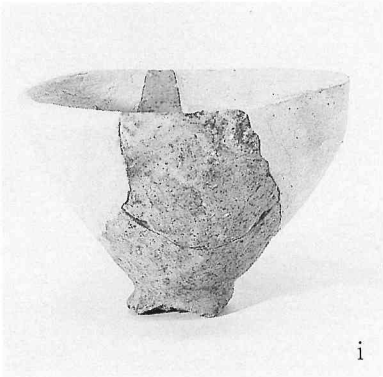
図版十四　弥生後期土器13（鉢）

a．土坑10－20
b．土坑７－26
c．土坑５－45
（×1/4）

図版十五　弥生後期土器14（鉢）



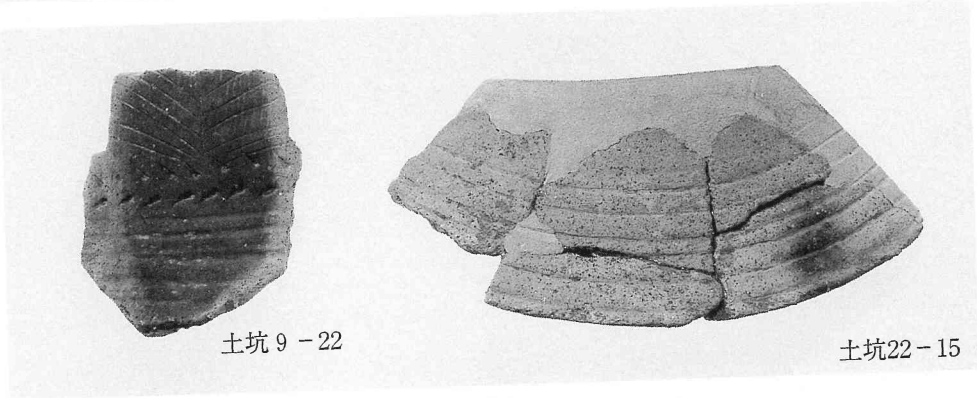




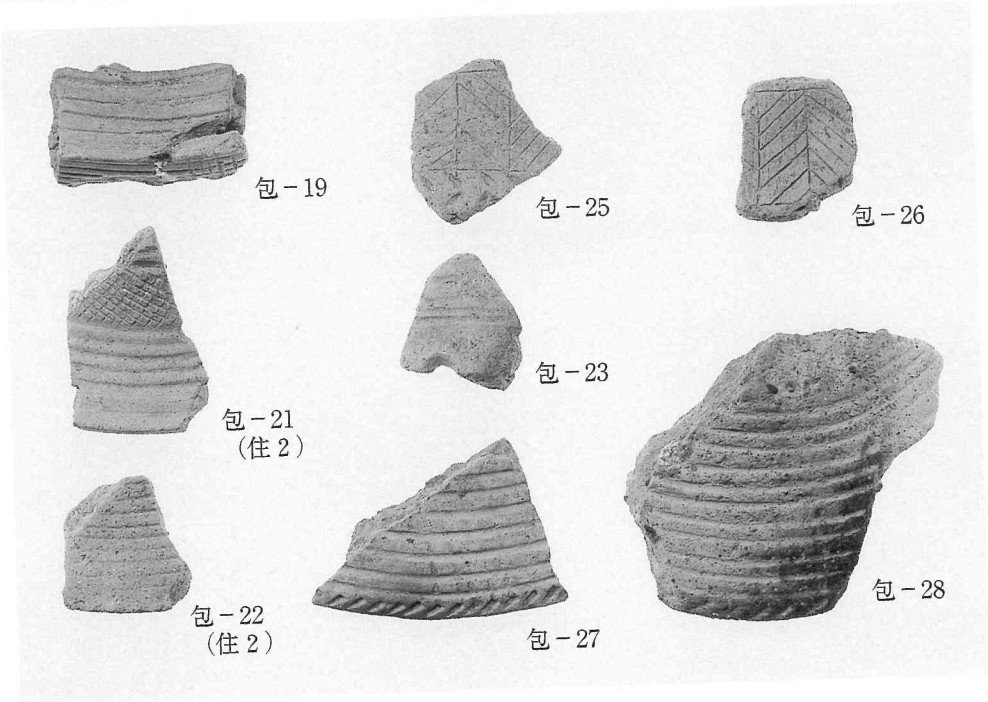
a．土坑７－23
b．土坑７－24
c．土坑11－15
d．土坑13－20
e．土坑５－44
f．土坑14－９
g．土坑６－６
h．土坑５－40
i．土坑５－39
（c以外：×1/3）

図版十六　弥生後期土器15（器台）

土坑14－13（×1/4）

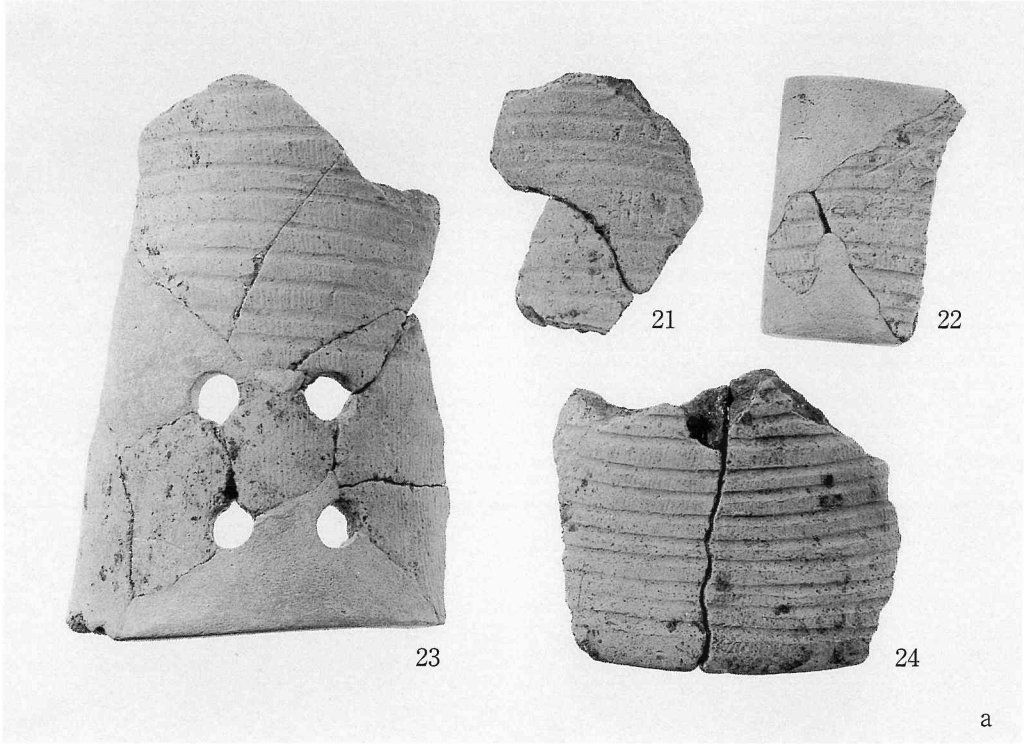


土坑９－22　　土坑22－15（×1/3）



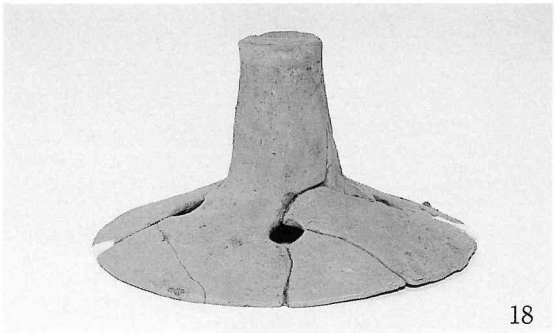
（×1/3）

図版十七　弥生後期土器16（器台・蓋・分銅形土製品）



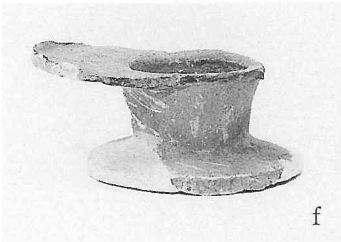
a．土坑26
b．土坑７－27
c．土坑10－22
（a・b：×1/3，c：×1/2）

図版十八　古墳時代前期土器1〈土坑33〉

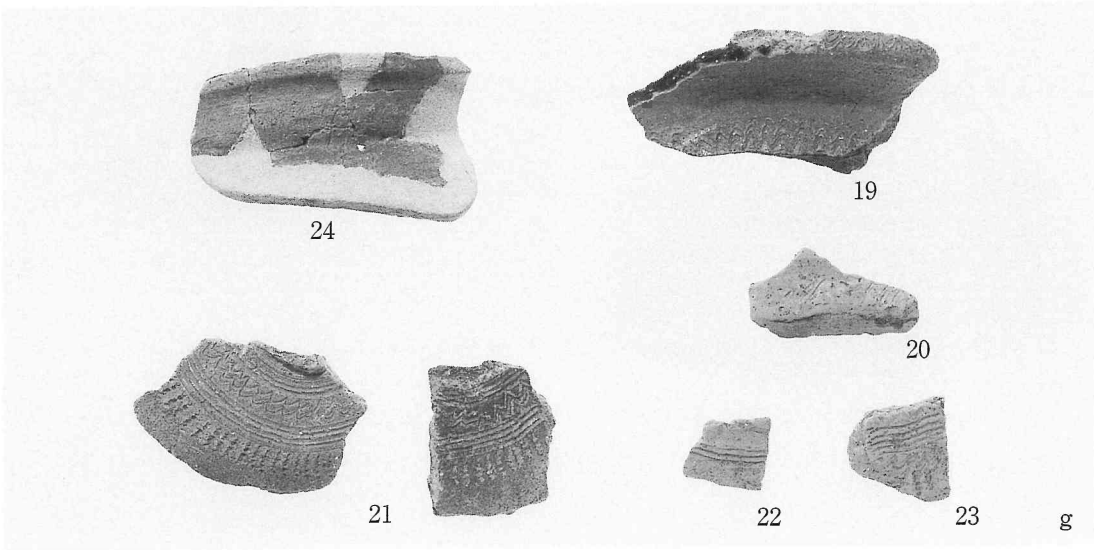


（1：×1/4，その他：×1/3）

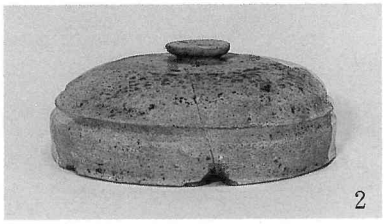
図版十九　古墳時代前期土器2

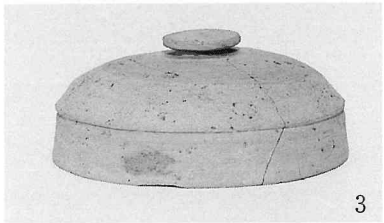


a．井戸１－１　　e．土坑32－３
b．土坑34－１　　f．竪穴住居１－18
c．井戸１－15　　g．竪穴住居１
d．土坑32－１
（a：×1/4，b～f：×1/3，g：×1/2）



図版二十　古墳時代後期土器〈竪穴住居1〉


2


3

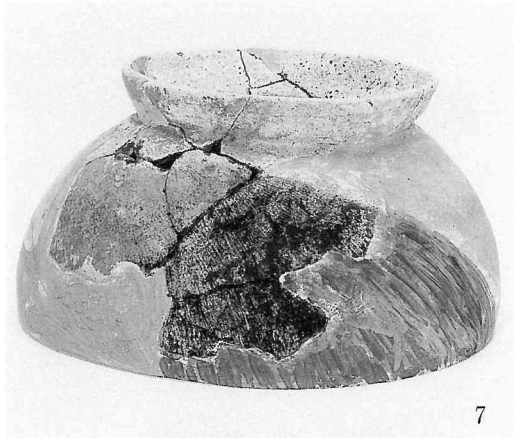
4

5

6

（2～6：×1/3）

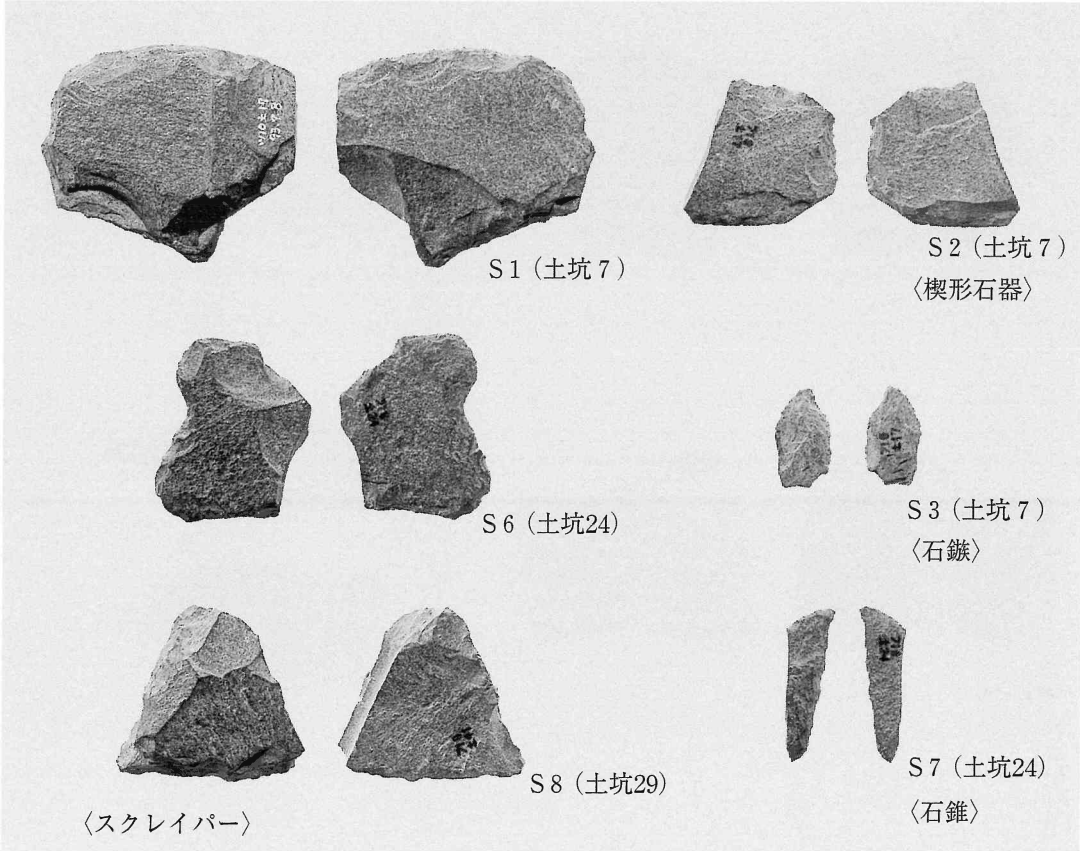
9


7

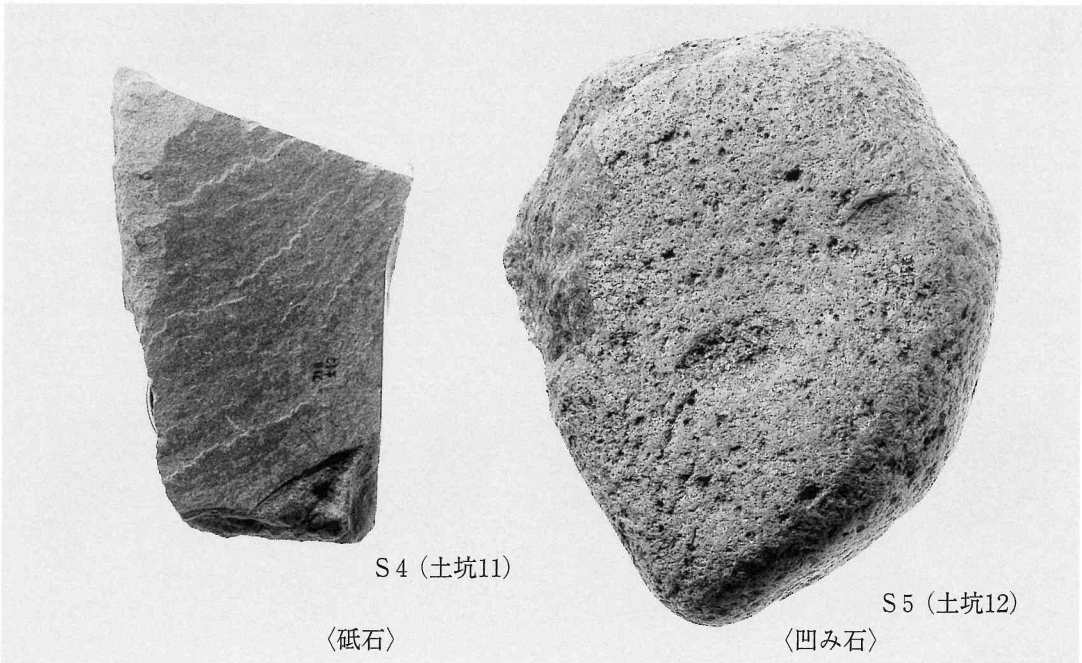
11

（7・9・11：×1/4）

図版二十一　石器1〈土坑〉

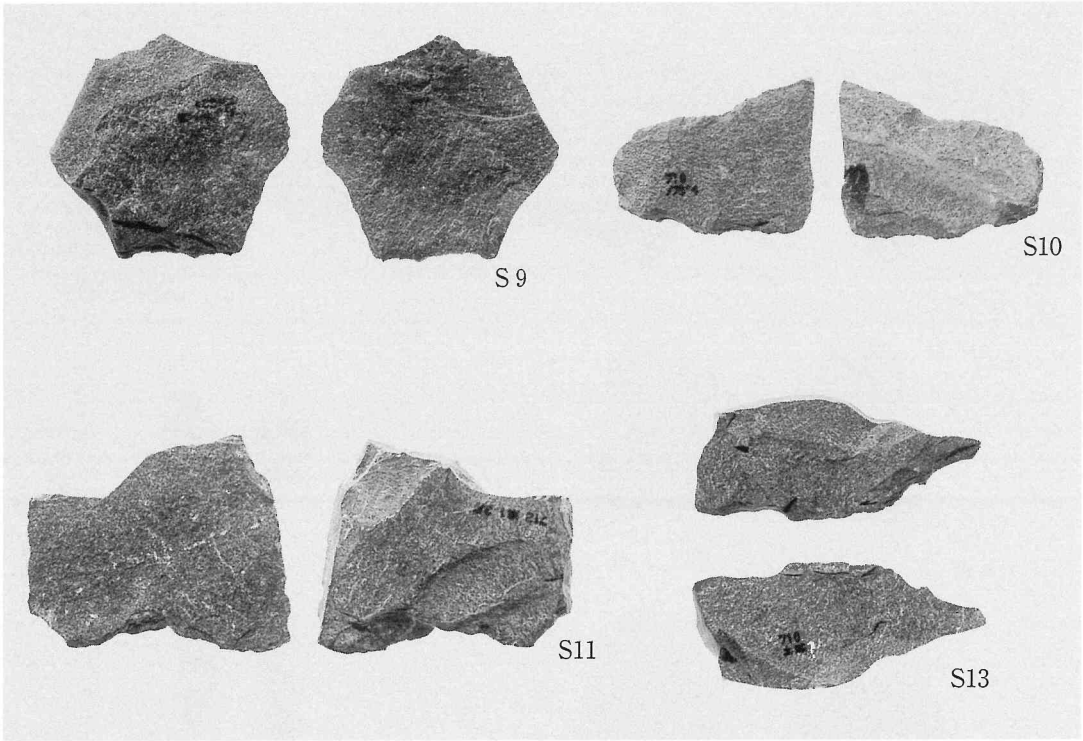


スクレイパー・石鏃・石錐

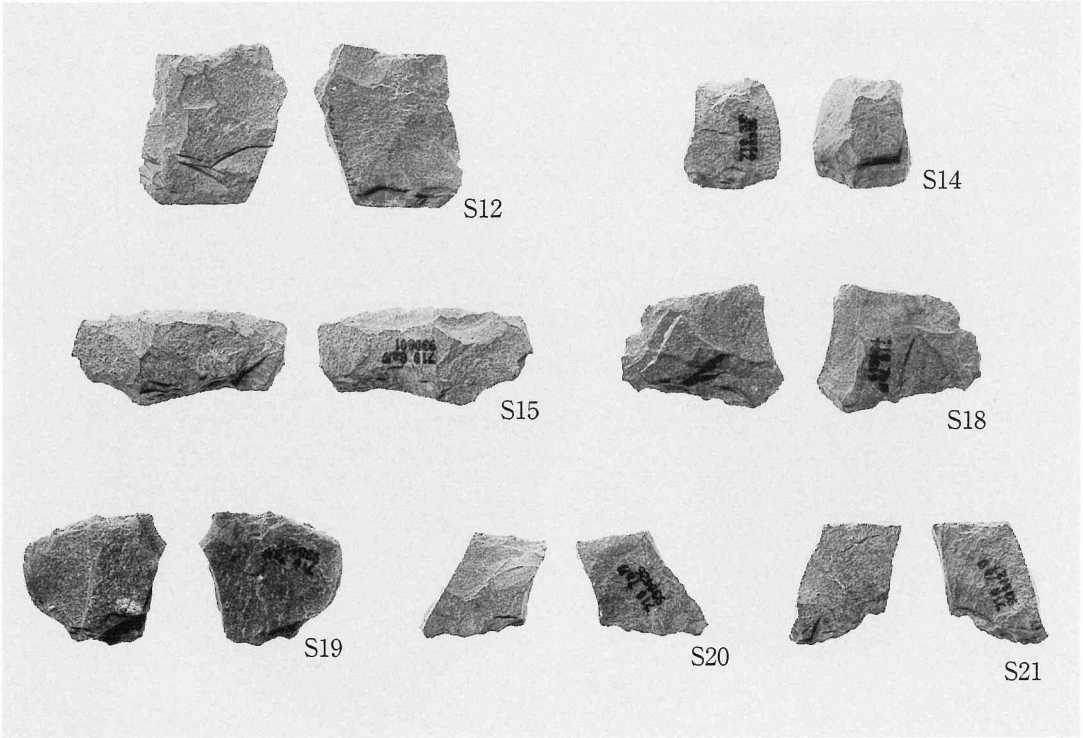


砥石・凹み石

図版二十二　石器2〈包含層〉

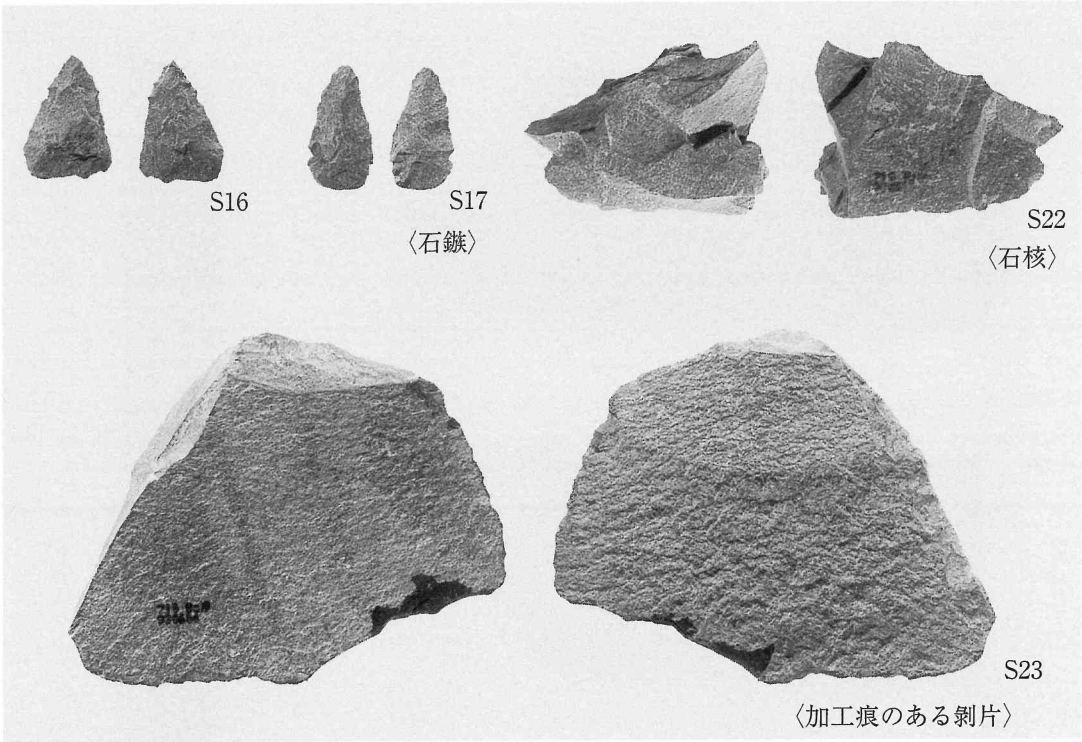


スクレイパー

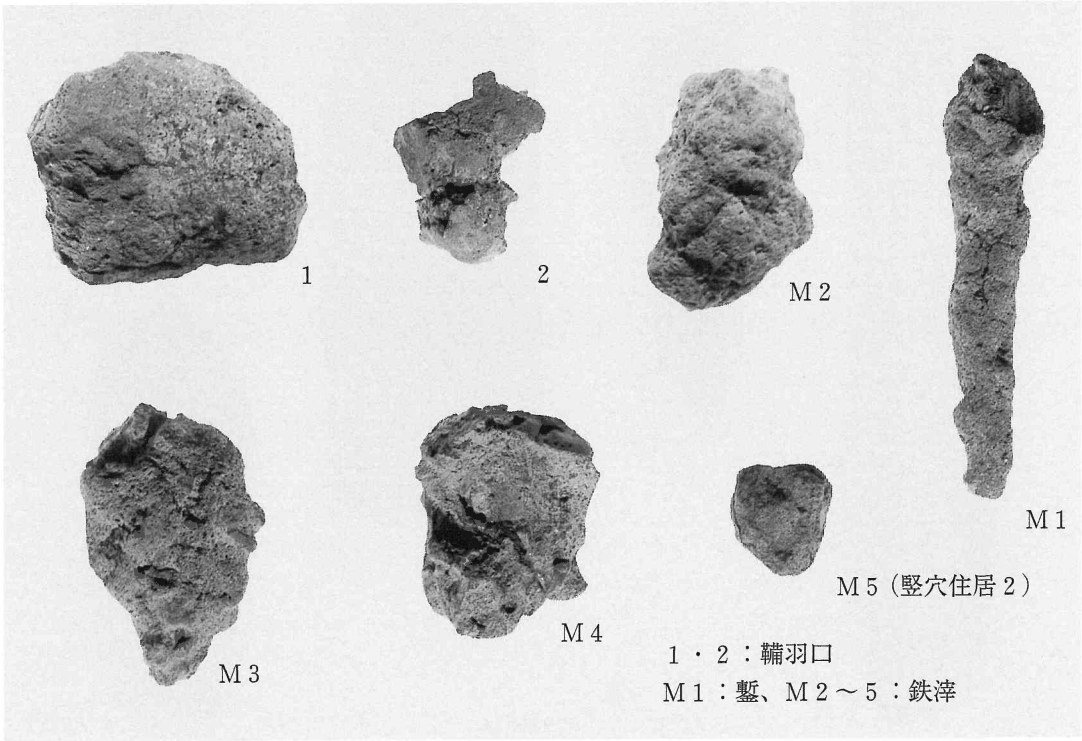


楔形石器

図版二十三　石器3〈包含層〉・その他

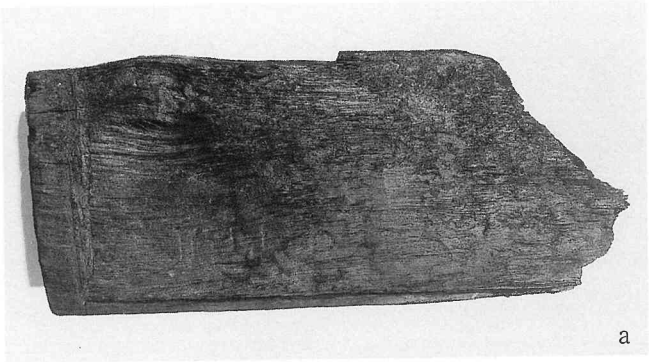


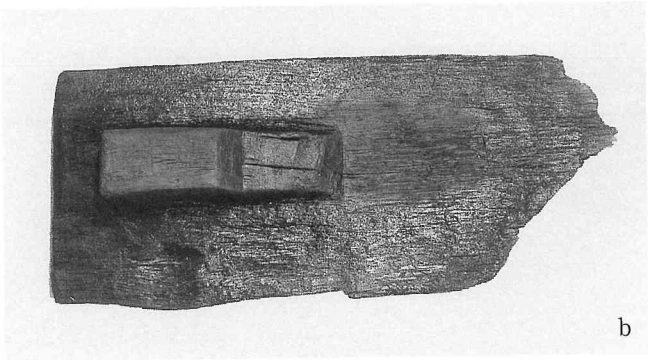
石鏃・石核・加工痕のある剝片



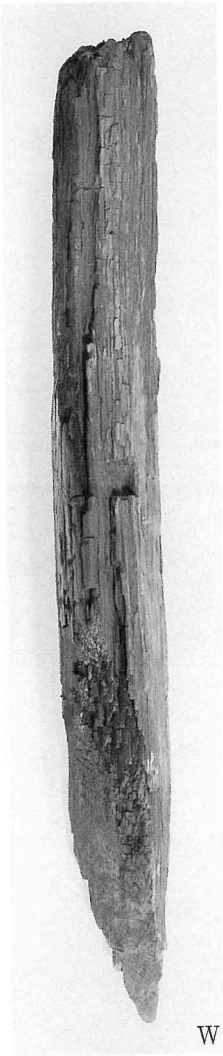
鞴羽口・鉄滓・鏨

図版二十四　木器1〈井戸1〉

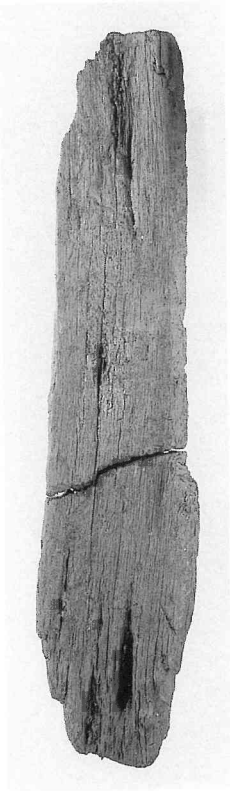




W1　a．表から　b．裏から



W6



W2

W3

W4

W5

W1：盤
W2～6：井戸枠材
（×1/7）

図版二十五　木器2〈井戸1〉

W 7 ・ 8 ：井戸枠材（×1/7）